

人喰い蛙男

捕獲され凌辱の末に
丸呑みにされる美女達

作者 大黒達也



『蛙男』

作者 大黒達也

一．あらすじ

闇の組織により、ある男が要人暗殺を目的として、改造手術を受けモンスターとして生まれ変わる。人間の数十倍という怪力を武器として暴虐の限りを尽す。蛙に似た外見を持つモンスターの食事は若き美女のみ。美しい裸身を生きたまま丸呑みにしてしまう。

二．登場人物

柿崎 かきざき
優斗 ゆうと

オリンピックで世界の頂点を極めたことがある元柔道家。邪鬼により蛙の特徴を備え、怪力無双のモンスターに改造される。食料は、若い女の肉のみ。

香織 かおり

邪鬼に対抗する秘密組織のメンバー。年齢二十三歳。類稀な美貌の持ち主。

恭子 きょうこ

香織と同じ組織のメンバー。香織同様に素晴らしい容姿の持ち主。

邪鬼 じやき

超絶的な体力を有し、不老不死で邪悪な精神の持ち主。世界的な人肉密売組織を指揮し、自らも美女達を犯し、彼女達の肉を貪り喰う。

猿 さる

邪鬼により、造られた改造人間。成獣のチンパンジーの肉体に、極悪犯罪人から摘出した脳を移

植した。成人男性の十倍近い腕力を持ち、極めて好色であり、美しい女を犯し、生きたまま貪り喰う。

三・目次

プロローグ	・ ・ ・ ・ ・	四
第一章	謎の美女軍団	・ ・ ・ ・ ・ 四十三
第二章	復活	・ ・ ・ ・ ・ 五十四
第三章	人食い猿	・ ・ ・ ・ ・ 八十三
第四章	潜伏	・ ・ ・ ・ ・ 百十九
第五章	人食いの島	・ ・ ・ ・ ・ 百三十一
第六章	喰われる美女達	・ ・ ・ ・ ・ 百六十五
第七章	人食い猿と人食い蛙	・ ・ ・ ・ ・ 百八十六
第八章	死闘	・ ・ ・ ・ ・ 二百八
エピローグ	・ ・ ・ ・ ・	二百二十

四・本編

プロローグ

午前零時、中天には血のように赤い満月が妖しく輝いていた。場所は瀬戸内海の中央部に位置する無人島から、数百メートル沖の海域。鏡のように、波一つない海面を黒々とした人型の生物が無人島を目指し、大きな足ヒレがついた前足と後ろ足を動かし進んでいた。

生物は体長が二メートルほどで、全身を分厚いスエットスーツに包まれていた。光の無い両目は満丸で口が驚くほどに大きく、小さな耳まで裂けていた。蛙の顔に酷似していた。

この世のものとは思えぬほどに、その生物は醜い顔をしていた。人形をした怪物に等しかった。

怪物は無性に飢えていた。新鮮な肉を渴望していた。意味の無い怒りに支配されてもいた。すべてを破壊したいという狂った衝動が、全身を張り裂こうとしているかのようにだった。

怪物は数百メートルを一気に泳ぎ切った。疲れも見せず、無人島の断崖絶壁に張り付いた。上を

見上げると、断崖が数十メートルも続いていた。器用に前足と後ろ足の足ビレを吸盤のように使い、荒々しい岩肌を登っていく。

数十メートルの断崖絶壁も怪物にとっては、大きな障壁では無かった。驚くほどの速さで、登り切った。休む間もなく、前方に広がる原生林の森に分け入った。

数分後、森は終わり、数百坪はある敷地とその中央に建つ、白亜の豪邸が現れた。広大な敷地内には、ヘリポートがあり一機のヘリコプターが着陸していた。断崖絶壁に囲まれた島への移動手段なのだろう。

島は無人数島の筈であった。何者かが秘密裏に建てたものであるう。

森を切り開いて造られた敷地は、高さ三メートルの鉄条網で周囲を囲まれていた。

怪物は、軽く踏ん張ってジャンプした。五メートルほども垂直に飛びあがり、一気に鉄条網を飛び越え、手入れの行き届いた芝生に着地し、その

まま凄まじい速度で、鉄筋三階建の屋敷に突進した。正面にある屋外プールに音もなく飛び込み、鼻面と両目だけ水面から出して、屋敷内の様子を伺った。正面のガラス扉は分厚いカーテンが掛けられていたが、隙間から光が漏れていた。

数分後、サブマシンガンを抱えた暴力団員風の男が、プールサイドを、鼻歌を歌いながら歩いて来た。怪物は、大きな足ビレが付いた前足で男の片足を掴み水中に引き摺りこんだ。その間、数秒あまり、男は悲鳴上げる間もなく、水中に没した。すぐに水面に真っ赤な血が広がっていく。続いて男の首なし胴体が水面に浮きあがって来た。

怪物は、音もなくプールから這い上がり、正面の大きなガラスドアに巨体を押し付けた。鍵はかかっていなかった。生物は静かにガラスドアをスライドさせ、屋敷内に侵入した。

そこは、広さが百畳ほどもある居間であった。広大な室内には高級ソファセットや大画面の液晶ディスプレイそれに高級家具がセンス良く配置されていた。

液晶ディスプレイには、レイプ物のアダルトビデオが映し出され、近くのソファには、黒色のスーツを着た暴力団員風の男達二名が食い入るように画面を見詰めていた。

近くのテーブルには、高級ウイスキーやサラミなどが盛られた皿が置かれ、自動拳銃二丁が無造作な感じで並べられていた。

怪物がまるで影のように男達の背後から近づいて行く。男達の一人が気配を感じたのか振り返った。鋭い鍵爪が付いた前足が、宙を引き裂いた。男の頭部が部屋の隅まで吹き飛んだ。返す前足でもう一人の男の頭部を鷲掴みにして、持ち上げた。骨が碎ける鈍い音がした。頭部を掴まれ中吊りにされた男の全身が激しく波打っていた。すぐにピクリとも動かなくなった。怪物はボロキレでも捨てるように頭部が碎かれた男の死体を放り投げた。

その頃、屋敷の二階にある主寝室では、バスローブを着て、頭部が禿上がった六十過ぎの男が、ベッドにうつ伏せに並べた三人の美女達の尻を順

番に舐め上げていた。

女達は皆、全裸で極上の肢体を持っていた。男に尻を舐められる度に極上の美尻が揺れ動いた。

男はサイドテーブルに置かれたドン・ペリニヨンのボトルをラッパ飲みにしながら、美女達の盛り上がった白い尻に顔を埋め、匂いを堪能し、美味しそうに淫液を啜り、膣を舐り、触っていた。部屋中に美女達の妖艶な色香と喘ぎ声が満ちていた。

男は三人の中から、最も背が高く、極上の肢体を持つ女を仰向けにさせて、両足を押し開き、合間に顔を埋め、美しいサーモンピンク色の膣を舐めた。両側の女達は、その女の乳房に喰い付き、乳首を舐め始めた。

ベッドサイドのテーブルには、食べかけの高級和牛ステーキやキャビア等が盛られた皿が並べられ、一本数十万円の値がつく年代物の高級ワインが、ワインクーラで冷やされていた。その上に無骨な感じがする回転式拳銃のパイソン三五七マガナムが、無造作な感じで置かれていた。

突然、木製のドアが木端微塵に粉碎した。ドアの向こうに巨大な影が佇んでいた。男が驚愕の表情を浮かべながら、テーブルの上に置かれていたパイソンを掴んだ。女達はひと塊になり、抱き合いながら美しい裸身を震わせ、泣き喚いた。巨大な影がゆつくりと室内に進んできた。それは蛙に似た顔を持つ、人型の姿をした生物であった。

男がベッドサイドに立ち、異形の怪物に向けパイソンの引き金を引き絞った。

分厚いスエットスーツに、着弾する度に怪物の巨体が揺れ動いた。スエットスーツは防弾仕様なのか、強力な三五七マグナム弾であっても弾き返した。

すぐに弾切れになり、撃鉄の音が虚しく鳴り響いた。男は女達を置いて怪物を回避するように部屋の隅を走り抜けようとした。怪物が大口を開け、緑色の液体を男に向かって吐き出した。

「ギャー！」

全身を緑色の液体に覆われた男が絶叫を上げ、悶え苦しんだ。みるみるうちに男の皮膚が爛れ、

溶けていった。筋肉が溶け白い骨が露になり、やがて床に崩れ落ちた。筋肉や内臓はすべて溶け、白い骨が床に横たわっていた。

怪物は、ひと塊になり震え、泣き叫ぶ女達三人を食い入るように見詰めた。すぐに視線をテーブルの上に置かれた豪華料理に向けた。ゆっくりとした足取りでテーブルに近づき、手掴みで和牛ステーキを巨大な口に放り込んだ。口内で肉を巨大な舌に絡ませ、肉汁を啜った。次の瞬間、怪物は苦しそうに自分の喉を押さえ、今食べたばかりの肉を白壁に向けて吐き出した。

その時、女達のひとりが、怪物の目を盗んで出口に向かって駆け出した。怪物の口から長大な舌が飛び出し、女の足首に巻き付いた。凄まじい勢いで女は引かれ、一瞬後怪物の両腕に抱かれていた。怪物が女の美しい乳房や太腿を食い入るように見詰めていた。

腕の中にはすすべで、シミひとつない女の裸身が震え慄いていた。

巨大な口の両端からは、透明な唾液が滴り落ち

ていた。怪物は、凄まじいまでの食欲を感じていた。怪物には極上の肢体が、まるで旨そうな食べ物に見えていたのだ。飢えは極限まで到達していた。怪物が腕の中で女の裸身を折り曲げ、大口を開け盛り上がった美尻から口内に押し込んでいく。女は助けを求めて泣き叫んだ。怪物の両眼が輝きだした。女の皮膚は滑らかで、舌に吸い付くようであった。美尻が口内に消え、むっちりとした太腿が呑み込まれていく。最後に女は万歳をするような格好で、口の中に消えた。驚くべきことに身長百六十センチ以上もある女がひとり、丸呑みにされてしまったのだ。

怪物の腹部は大きく盛り上がり、微かに動いていた。怪物は大きな溜息をついた。これほどの美味は味わったことが無かった。胃の中で溶けていく、女の美肉は例えようもないほどに美味かった。女をひとり丸呑みにしたことで、激しい飢えは鎮まっていた。

残る女達ふたりに視線を向けながら分厚いスエットスーツを脱ぎ始めた。

スーツの下から、灰色のヌメヌメとした皮膚が現れた。股間には、ビール瓶ほどもある巨根が天を衝いていた。

怪物の巨体が宙を飛んだ。ベッドの上に着地し、二人の女を抱きしめた。二人を引きはがし、ひとりの股間を激しい勢いで舐め始めた。もうひとり はあまりの恐怖に意識を失いベッドの上に横たわった。

程無くして女の両足を大きく押し広げ、そそり立った男根を女の膣に押し当て強引に振り込んだ。膣を裂かれる激痛に女断末魔の様な絶叫を上げ、背筋を大きく仰け反らせた。

次の瞬間女の膣は裂け、ビール瓶の様な巨大な男根が根元まで突き入れられた。女は白目を剥いて失神した。怪物は意識を失った女の膣に何度も男根を出し入れた。その度に鮮血が迸った。怪物は腰を激しく前後させながら、大口を開け、舌を女の首に巻き付け引き寄せた。男根を抜いて、一気に頭部を丸呑みにした。形のいい美しい乳房が口内に消え、すぐにシミひとつない尻が呑み込

まれた。怪物の口から、女の爪先が見えていた。それもすぐに口内に消えた。

残る女は、今も意識を失いベッドの上に、うつ伏せの姿勢で横たわっていた。むき卵のように白くすべすべの尻が怪物の方に向けられていた。怪物は暫くの間、大きく膨らんだ腹を擦りながら、女の尻を食い入るように見詰めていた。水掻きのついた前足で、女の盛り上がった白い尻を押し開いた。アヌスは毛も無くきれいなサーモンピンク色をしていた。

巨大な顔を女の尻に押し付け、匂いを嗅いだ。怪物は、うっとりとした表情を浮かべ、深い溜息をついた。半ば開かれた巨大な口から、長大な舌がゆっくりと出てきた。それは女の尻を這いまわり、股間から膣を弄った。最初は表面に触れる程度であったが、次第にゆっくりと膣口から侵入させていった。怪物は舌の先端部分を棒状にして、器用な感じで膣に出し入れさせていた。

すると意識を失っていた女が、僅かに喘ぎ始めた。盛り上がった白い尻をモゾモゾと動かし始め

た。女はSEXをしている夢でも見ているのであろうか。やがてむき卵のようにすべすべで白い尻を淫らに動かし始めた。怪物の舌先も次第に動きを速めていく。

女は半ば意識を失った状態で、舌の動きに合わせながら、豊かな尻を振った。

最後には、背筋を仰げ反らせて、鋭い喘ぎ声をあげながら絶頂に達した。

「社長。最高に気持ちよかったですよ」

うつ伏せの状態で怪物の前に横たわる女は、怪物に舌で犯されていたとは、気づいていないようだ。

「うとうとううう……」

怪物が顔を女の尻に近づけ低い唸り声を上げた。

「社……、社長なんでしょう？」

その時、女の脳裏には、先ほどの悪夢が蘇ってきた。失神した女は怪物の出現を夢であると思っていたのだ。今、女は背後から迫りくる只ならぬ、気配に背筋も凍るような恐怖を感じていた。うつ伏せのまま、恐る恐る首を後ろに回した。

目の前に、この世のものとは思えぬほどに醜い怪物の顔があった。

「キヤー！いや！」

女は絶叫し、怪物から逃れようとするが、腰が抜けてまったく動くことができなかった。仲間の女が、怪物に生きたまま呑み込まれたことを思い出していた。

「お……お願い。食べないで。死にたくない」

女は消え入るような声で囁いた。

怪物の口元から透明な唾液が滴り落ち、女の太腿を濡らした。次の瞬間、長大な舌が飛び出し女のアヌスに突き刺さった。女の美しい顔が激痛に歪み、すぐに女の口から、舌の先端が飛び出してきた。怪物の舌が女の裸身をアヌスから口まで貫いたのであった。女は両目を見開き、声にならない呻き声を上げた。恐怖と絶望に満ちた瞳を見開いた。舌が引かれ女の肉体は引き寄せられ、尻から怪物の口に呑み込まれていく。身長百七十センチほどもある女が呑み込まれるまでに、大した時

間はかからなかった。最後まで女は、逃れようともがいていたが、美しい瞳にいったいの涙を浮かべながら、洞窟のような口内に呑み込まれていた。

三人の女達を丸呑みにして、空腹はやっと収まっていた。女達は腹の中で強力な胃酸により、溶けている筈であった。女達の滋養に満ちた肉体を吸収し、全身に力が漲っていた。ベッドの上で仰向けになり、すぐに高齧を上げ始めた。



三日後の午前零時、東京都品川区の中央を流れる運河の水面に巨大な影が動いていた。それはちようど三日前に、瀬戸内海に浮かぶ無人島で、多くの人命を奪った人型をした怪物であった。今夜も怪物は、若い女の柔肉に飢えていた。飢えとともに深く強烈な憎しみを抱いていた。怪物は、巨大な足ビレがついた前足を動かしながら、ゆっくりと運河を泳いでいく。

17

「嫌！誰か！助けて！」

運河沿いにある公園の方から若い女の悲鳴が聞こえてきた。怪物は暗い水面で停止し、上方を見上げた。数十メートルぐらいのところで誰かが争っている気配がした。

怪物は躊躇していた。心には、支配者の命令が釣鐘の音のように木魂していた。使命を果たさねばならなかった。一旦は無視して通り過ぎようとしたが、上方から漂いくる若い女の微かな匂いが怪物の心を揺さぶっていた。時間はまだ、たつぷりとある。怪物は、自分の心に言い聞かせるようにして、運河の壁面に張り付き、登り始めた。

巨木の近くに位置する茂みの方から、女の啜り泣きが聞こえてきた。付近の路上に人影は見られなかった。怪物は茂みの隙間から、覗き込んだ。

茂みの近くにある街路灯が、二人の男女が絡み合っている様子を暗闇の中に浮き上がらせていた。女の方は二十歳ぐらいの若さで、衣服を脱がされ全裸にされていた。近くに女の衣類が散乱していた。女は、街路灯の暗い明かりでも、はっきりと確認できるほどに美しい容姿をしていた。

男の方は、四十過ぎの中年男で、皺だらけで薄汚れた作業着を着ていた。ナイフを女の首筋に押し付けるようにして、仰向けに横たえた女の膣を激しい勢いで舐っていた。女の美しい大きな瞳は恐怖のあまり見開かれ、美しい顔は涙に濡れていた。男は空いている方の手で、女の盛り上がった白い乳房を鷲掴みにし、狂ったように膣やクリトリスを舐めていた。男が動いた。女を芝生の上に、うつ伏せの姿勢で横たえた。むき卵のように白くてすべすべの尻が、男の視線を貫いた。男は思わず呻き声を上げ、憑かれたような顔で女の尻を見つめ、両手で押し開いた。美しいサーモンピンク色のアヌスが見えた。男は女の尻に顔を押し付け、狂ったようにアヌスを舐り始めた。

女の無念に満ちた啜り泣きが聞こえてきた。男は暫くの間、クリトリスや膣を指先で弄りながらアヌスを舐っていた。男の背後に怪物が立ち、見下ろしていた。怪物の両手が伸び、男の首と肩を掴み、一気に頭部を胴体から引き千切った。大量の鮮血が芝生を真っ赤に染め上げた。首なし胴体

を数十メートル後方の運河に投げ付けた。

そのとき女はまだ、異変には気づいていなかった。怪物の舌が伸び、女の膣に突き刺さった。女の白い背筋が大きく仰け反った。膣内の舌が、細かく振動し膣壁を微妙に刺激した。怪物は舌を男根のように動かした。女は、恐怖と混乱のせいで、怪物の舌を男根と勘違いしていた。男が持っていたナイフが目の前に突き刺さっていた。女は死の恐怖から逃れようと目を閉じた。男が早く射精しこの場から去ることを祈っていた。

舌の絶妙な動きが、女にこれまで感じたことのない快感をもたらし始めた。死の恐怖は相変わらずであるが、股間から湧き上がる強烈な快感に意識が遠のきかけた。

思わぬことに大量の愛液が、膣から迸り出た。ふいに腰を掴まれ宙に持ち上げられた。

次の瞬間、膣を引き裂かれるような激痛を感じた。怪物が舌の代わりにビール瓶ほどもある男根を膣にねじ込もうとしていたのだ。女の膣は十分に濡れていたので、何とか膣内に収まった。さら

に舌が女のアヌスに突き刺さった。怪物は男根と舌の両方で女の膣とアヌスを犯していた。女の美しい裸身が前後の穴を貫かれ、宙に浮き揺れ動いていた。

膣を引き裂かれそうになる激痛は次第に和らぎ、代わって膣とアヌスを同時に犯される快感が湧きあがってきた。それはこれまでの人生で感じたこととの無いような凄まじいまでの快感であった。女は黒髪を振り乱し、美しい裸身をくねらせ、泣き叫んでいた。

がくんという感じで、女の裸身が揺れた。女は絶頂に達し、意識を失った。

女の裸身が白い尻から怪物の口に呑み込まれていく。むっちりとした太腿が消え、盛り上がった白い乳房が呑み込まれた。一瞬後、女の裸身は怪



物の口内に呑み込まれてしまった。怪物の腹は大きく膨らみ、微かに動いていた。強烈な胃酸により、女の全身は溶かされていくのである。怪物は大きなゲップをして、満足げな笑みを浮かべた。

三十分後、怪物は超高層ビルの壁面に張り付いていた。凄まじい勢いで、垂直の壁を登っていた。上っている個所は、小路側であり別のビルの影となっている。発見される可能性は僅かであった。数十分後、怪物はビルの屋上に達していた。広さが数百坪はある屋上には、中央部分に深さ五メートルほどで広さが二百坪ほどの中庭が造られていた。怪物が屋上にうつ伏せの姿勢で横たわり、中庭を覗き込んだ。中庭に周囲には、居室が設けられているようだった。そこから光が漏れていた。

中庭には、様々な観賞用の樹木が植えられ、中央には透明な水が張られたプールが造られていた。プールの周囲には、数十人の男女がいた。男はタキシードを着ていたが、二十代前半の年齢と思わ

れる女達は皆、全裸であった。どの女も高級モデル並の美しい容姿をしていた。男達の中には、サイレンサー付きのサブマシンガンを携帯している者もいた。

プールの近くには、一辺が六メートルほどの仮設ステージが造られ、その上にはタキシード姿の若い男と、全裸で後ろ手に縛られた若い女が立っていた。女の背丈は百七十センチくらいで、高級モデルも及ばぬような美しい容姿をしていた。スポットライトに照らし出された女の美しい顔は、恐怖のためか蒼白になっていた。肩先が微かに震えていた。

「皆様、今宵は組を裏切り、敵に情報を売っていた女を処分いたします。女の名は、香田美奈といい、銀座の高級クラブでホステスをしていました。年齢は二十三歳です。どうですか、この美しい顔をご覧ください。スタイルも抜群でしょう」

マイクを手にした若い男が、美奈という名の女の乳房を空いている方の手で鷲掴みにした。

「女のケツを見せろ！」

ステージのすぐ近くに置かれた椅子に座っていた中年男が、唸るように言った。白髪をオールバックにした中肉中背の男は、全身から暴力の匂いを発散させていた。

「へい。親分。わかりやした」

「親分ではなく、社長と呼べ。さっさとケツを拝ませろや！」

若い男は、美奈を後ろ向きにさせ、盛り上がった白い尻を突き出させた。シミ一つなく、すべすべでむき卵のような尻であった。周囲にいた者達の視線が一気に集中した。

「穴を見せてくれ」

先ほどの男が、椅子から身を乗り出すようにして、上ずった声を出した。

男が、女の尻に両手をあて、大きく割った。無毛でサーモンピンク色のアヌスがスポットライトの光に映し出された。

「お願い。助けて下さい」

女はか細い声で命乞いをした。

「助けて下さいだと！手前のお陰で、組は、おっ

と会社は大損をしたんだ。お前の命で償ってもら
うぜ」

社長と呼ばれたオールバックの男が、忌々しそ
うな声を出し仮設ステージに上がり、女の背後で
膝間ついた。女の尻を両手で割り、顔を押し付け、
匂いを嗅いだ。

「最高のケツだぜ。殺すにはもったいないが、仕
方ないな」

男が、尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを舐り始
めた。女の美しい尻が震え慄いていた。押し殺し
たような泣き声が聞こえてきた。男は執拗に女の
アヌスや膣を舐め回した。女が耐えきれず、床に
両手をつき四つん這いの姿勢を取っても男は舐め
続けた。

最後には、ズボンを下ろし、真珠入りの男根で
膣を背後から貫いた。数分後、男は絶頂に達し、
女の中に白濁した精液を放出した。女への責めは、
それでは終わらなかつた。

ステージの周囲で、強姦劇を觀賞していた女達
ふたりが、マイクを持った若い男に呼ばれた。美

しい容姿を持つ女達は、全裸にペニスバンドを嵌めただけの格好で、ステージに上がり、ふたりで女をサンドイッチにして、膣とアヌスを同時に犯し始めた。責め役の女達は、満面の笑みを浮かべながら、ペニスバンドを嵌めた腰を振り続けた。二本の凶太い張形が女の膣とアヌスに出し入れされた。

朦朧とした意識の中にある女に対し、女達は膣やアヌスを張形で犯しながら、唇を奪い、乳房を強く揉んだ。遠慮はまったく見られなかった。命乞いをし、泣き叫ぶ女の顔に唾を吐きかけ、乳房を驚掴みにした。

中庭にいた数十人の男女は、皆、ステージを取り囲み、食い入るように美女達の残酷なレズビアンショーを見ていた。

それまで岩のようにじっと動かなかった怪物が、イモリのように壁を伝い降りて、プールに身を沈めた。中庭にいた男女達は、誰も気付かなかった。女達のひとりがプールに飛び込んできた。酔いを醒ますかのように、裸身を水面で仰向けにして、

ゆっくりと漂っていた。怪物はプールの底に張り付き、水面を泳ぐ美しい裸身をじっと見詰めていた。白い裸身が真上に達した時、舌が女のアヌスに突き刺さった。あつという間にプールの底に引き摺りこんだ。もがき苦しむ女は、恐怖に美しい顔を歪めながら、怪物の大口に、盛り上がった白い尻から呑み込まれていく。水面に浮かび上がる女が吐き出した大量の気泡に気付く者はひとりもいなかった。身長百七十センチ近くある美女が、あつという間に、怪物の口内に消えた。

数十分後、プールサイドの仮設ステージでは、美奈が四つん這いにされ、全身に刺青を入れた若い男達ふたりに口とアヌスを犯されていた。アヌスを犯していた男が果てると、すぐに次の男が背後から、真珠入りの男根でアヌスを貫いた。美奈は既に十人以上の男女に犯され、失神と覚醒を繰り返していた。体力は限界に近かった。朦朧とした意識の中にあっても、下半身は男根の動きに合わせるように、猥らに揺れ動いていた。

「余興は終わりだ。処刑を始める。工藤！お前の大砲をかせや！それから女達を中に入れる」

白髪をオールバックにした中年男が、ステージに上がった。上半身は裸であり、背中一面には昇り竜の彫り物をしていた。中庭にいた全裸の女達も、部屋に戻された。

工藤と呼ばれた身長二メートル以上はあると思われる男がステージに上がり、ヒップホルスターから大型の回転式拳銃を抜いて、男に無言で手渡した。

「美奈。こいつがわかるか？これはな。世界で二番目に強力な拳銃でレイジングブルっていうんだぜ。ダーティーハリーが持っていたマグナム四四なんて目じゃない。二倍の威力があるんだ」

中年男は、テーブルの上で仰向けになり、朦朧としている美奈に言い聞かせるように話した。美奈の股間からは白濁した精液が滴り落ちていた。

男は拳銃のシリンダーを外し、銃弾をすべて抜いてから、一発だけを充填し、美奈の目の前でシ

リンダーを回転させた。

「ロシアンルーレットって、知っているか？これからそいつをやろうと思うんだ」

男は、美奈の両足を大きく開かせて、臍に銃口を押し込んだ。朦朧としていた美奈の表情が、凍り付いた。美しい瞳を見開き、ブルブルと震えだした。

「お願い、許して……」

蚊の鳴くような細かい声で命乞いをした。

「五発のうち、一発だから確率は二十パーセントになるな」

独り言のように呟きながら、臍内でゆっくりと銃身を前後させた。銃口部分のフロントサイトにより、臍壁が裂傷し鮮血が吹き出していた。美奈は美しい顔を涙に濡らし両手で身体を支えながら、嗚咽を漏らしていた。

「いくぜ」

「嫌！」

美奈の絶叫の後で、カチリという撃鉄が落ちる乾いた金属音が響いた。弾丸は発射されなかった。

「お前はついているな」

男は、泣き喚いている美奈をうつ伏せにした。むき卵のようにすべすべで、盛り上がった白い尻が男の視線を貫いた。

「本当に旨そうなケツをしてやがる。食っちゃみたいくらいだ」

銃口を美奈のアヌスに当て、撃鉄を引いた。

「確率は二十五パーセントだ。ここから撃ち込んだら、腹は吹っ飛ぶな」

続いて、再び撃鉄が落ちる音が響いたが、今度も不発だった。美奈は、絶叫を上げた後で、ぐったりとテーブルの上に横たわった。恐怖のあまり失神したのだ。股間から、小水が漏れ出し、テーブルの上に広がっていく。

「これで助かったわけじゃないぜ。いや。こいつがお前にとっては何地獄の始まりなんだ」

意識を失った女の白い尻に頬ずりをしながら言った。

「工藤！女を調理長のところに運ぶんだ！」

先ほどの大男が、ステージに上がってきて、失

神した美奈の裸身を軽々と肩に乗せ上げ、その場を後にした。

「大石。弁護士の先生は何時に来るんだ？」

ステージ横に待機していた若い男に横柄な感じで聞いた。

「後、一時間ぐらいの予定です」

「そうか、丁度いい時間だな」

一時間後、そのビルの屋上にあるヘリポートに一機のヘリコプターが着陸し、機内からひとりの男が降り立った。男は三十代後半ぐらいの年齢で、紺色のスーツを着ていた。神経質そうな細面の顔には、銀縁メガネが光っていた。襟元には弁護士バッヂをつけていた。

五分後、弁護士の男は屋上に造られたプールがある中庭にいた。中庭には男の他に、先ほどの中年男と、サブマシンガンで武装した護衛の男達五人だけだった。

中年男が、プールサイドに置かれた白いテーブルの席についていた。

「先生、御久し振りです。邪鬼様はお元気ですか？」

中年男が、弁護士の男を手前の席に手招きした。
「邪鬼様には、最近、お会いしておりません。それで今日は何のようですか？」

弁護士の男は、席につきながら尋ねた。

「久しぶりに先生と食事をしながら、ビジネスの話をしようと思ひましてね」

中年男は、目を細めながら、冷たい笑みを浮かべた。

「ビジネス？」

「最近是不景気で、売上が大分減りましてね。サツの動きも活発でシャツも全然売れなくなりましてよ」

「それで邪鬼様への上納金が滞っているというのですか？」

弁護士の顔が少し陰しくなった。

「そうなんですよ。邪鬼様は、さぞご立腹でしょ

うか？」

中年男が、弁護士の顔を窺うような表情を浮かべた。

「金が無いなら、代わりに若くて美しい女達を買物とすれば良いでしょう。街に出ればいくらでも調達できる筈だ」

「若い女を浚うのはリスクが大きすぎますよ。すぐに足がついてしまう」

「藤堂さん。貴方は邪鬼様の恐ろしさを理解しているのですか？」

弁護士の男は、まるで近くで誰かが聞いているかのように意識して、小声で言った。

「当り前でしょう。闇の世界で邪鬼様を知らない者は潜りだ」

「最近、貴方が政界の大立者と仲良くしていると
いう噂をよく耳にしますよ」

「大臣とは懇意にしていたいていますよ。なにせ幼馴染なんですね。そうそう、堅い話はこれくらいにして、飯にしましょうや」

藤堂と呼ばれた中年男が話題をかえた。

「美奈はどうしたんですか？一緒に食事をするという約束でしたね」

「先生は、よっぽどあの女がお気に入りに見える。心配しないで下さい。ちゃんと呼んでありますから、すぐに此処に来ますよ」

その時、中庭に通じる大きなガラス扉が開かれ、モデルのように美しい女達二人が、キャスター付きテーブルを押してきた。女達は一糸も纏わぬ全裸であった。テーブルの上には、熱々のステーキやサラダ類が載せられていた。

藤堂が、テーブルで配膳をする女の尻を撫でまわしていた。女は藤堂に向けて作り笑いを浮かべていた。

「じゃあ。俺達の未来に」

藤堂は、赤ワインが入ったグラスで乾杯の仕草をした。弁護士の名も乾杯を返した。

乾杯の後で濃厚な赤ワインを一口味わってから、目の前に並べられた料理の数々を食べ始めた。弁護士が熱々の肉汁がしたたるステーキを一口頬張った。

「どうしたんですか？先生？」

「こんな肉は食べたことが無い。まったくとしていて、癖が無くいくらでも食べられそうだ。何の肉ですか？」

弁護士が、驚いたような表情を浮かべた。

「気に入りましたか？特別に飼育したメス豚の腿肉ステーキですよ」

「豚でしたか。しかし初めて口にする味です。癖になりそうだ」

弁護士が食べるようにステーキ肉を頬張った。

「先生は、邪鬼様と食事をされたことは無いのですか？」

「邪鬼様とは、直にお会いしたことは無いのです。電話かメールのみのお付き合いです」

「そうだったんですか。実はね。この料理は邪鬼様から教えられたんですよ。一度ご招待いただき、私も病みつきになってしまいました」

藤堂も肉汁が滴る肉を頬張り、満面の笑みを浮かべた。

「特別な飼育をすると豚肉って、こんなに美味に

なるのですね。どこで売っているんですか？」

「そいつは企業秘密でしてね。まあ、先生は特別な方ですから。今、お見せしますよ」

「切り身を売ってくれるのですか？」

「そんなところですよ」

藤堂が、頭の上で両手を叩くと、ガラス扉が開けられ、調理服を着た中年男がキャスター付きテーブルを押ししてきた。テーブルの上には白いシーツをかけられた何かが載せられていた。給仕をしていた女達は藤堂により、戻された。

「さあ、とくとご覧ください」

藤堂が、調理服を着た男に目で合図を送り、白いシーツが取り除かれた。

「美奈！」

弁護士が立ち上がり、その場に凍り付いた。目の前には、両手両足を切断された美奈の裸身が横たわっていた。藤堂が美奈の口から猿轡を外した。

「薬が効いているから痛くないだろう？俺に従うなら、少しの間生かしておいてもいいぞ。毎日、

犯りまくりだがな」

藤堂が美奈の盛り上がった白い乳房を驚掴みにした。

「せ……先生。助けて……」

美奈が泣き腫らした顔で弁護士に助けを求めた。

「き……貴様、美奈に何をした！」

「そんなの見りやわかるだろう？手足を切ってダ
ルマにしたんだよ。ついでに手足は料理の材料に
使ったんだ。お前もえらく気に入っていたじゃな
いか」

藤堂の話し方は、先ほどとはすっかりかわって
いた。

「料理の材料だって……。ま……まさか……」

「そのまさかさ。美奈の腿肉は絶品だったぜ」

藤堂は、ステーキの一切れを美奈に見せつける
ようにして食べた。美奈の美しい顔が蒼白になっ
た。

「何故、こんなことをするんだ？」

弁護士はテーブルに両手を付き、肩で息をしな
がら藤堂を睨みつけた。

「しらばくれるんじゃないねえ！お前と美奈がつるん

で、邪鬼の野郎にあらぬことを言い、俺を貶めようとしてやがっただろうが！」

「ご……誤解だ」

「ツベコベぬかすんじゃないやねえ！」

藤堂は立ち上がり、パイソン四インチマグナムをベルトから抜き放った。茫然と立ち尽くす弁護士頭部に銃口を押し付け、引き金を絞った。鈍い銃声とともに弁護士の頭部が砕け、周囲に脳漿が飛び散った。鮮血が藤堂の顔面を濡らした。

「嫌！先生！死なないで！」

美奈は、手足のない裸身を震わせながら泣き喚いた。

「そんなにこの先生が気に入っていたのか？」

藤堂はズボンを下し、美奈の腰を両手で押さえつけて、真珠が入った男根を膣に挿入し激しい勢いで腰を振り始めた。

「獣！あんたは人間じゃないわよ！」

美奈は泣きじやくりながら、叫んだ。

美奈のアヌスに指先を入れ、かき回しながら膣を犯し続けた。最後には白濁した精液を美奈の体

内に注ぎ込んだ。

「俺が獣だって？そうさ、俺はお前の言うように血も涙も無い男だぜ」

手足の無い美奈の裸身をうつ伏せにさせて、尻の割れ目に顔を押し込み、アヌスを暫くの間、舐り続けた。

「お前のケツは最高だぜ」

パイソンの銃身を美奈のアヌスに突き込んだ。アヌスが裂け、鮮血が迸った。美奈は絶叫を上げ、全身を震わせた。

「どうだ？ケツをこいつで犯される気分は？」

「も……もう止めて！」

「そうかい、じゃあこれで終わりだな」

続いて、鈍い銃声がして美奈の全身が大きく揺れた。美奈は白目を剥いてテーブルの上に突っ伏した。腹の下から鮮血が流れ出し、真っ白なテーブルクロスを朱に染めていく。

「何だ！お前は」

「化物だ！」

その時、背後にいた部下達が叫び声を上げなが

ら、サブマシンガンを連射した。藤堂が振り向くと、部下の一人が、全身をスエットスーツに身を包み蛙のような顔をした怪物に頭部と身体を掴まれ宙に持ち上げられているところであった。

男の断末魔が湧きあがり、すぐに止んだ。怪物は引き千切られた頭部と胴体を投げ捨て藤堂に向ってきた。再びサブマシンガンの連射音が響き渡った。分厚いスエットスーツを全身に纏った怪物に銃弾が命中するが、少し身体を揺らすだけで倒れることは無かった。

怪物が大きく上空にジャンプした。絶叫を上げながらサブマシンガンを連射するふたりの男達に飛びかかった。鉤爪と大きなヒレがついた前足が、男の首筋を搔いた。鮮血が迸り、生首が宙を飛んだ。残る一人も前足で腹部を縦に切り裂かれ、内臓をまき散らしながら、プールに転落していく。

藤堂は、怪物に片足を掴まれ、屋上の縁から逆さ吊りにされていた。小路側なので地上は暗闇に

包まれ真つ暗であった。全身から冷汗が滴り落ちていた。地上数百メートル以上の高さであり、落ちれば確実な死が待っていた。

「放しやがれ！いや。放すな！おい、この化物野郎。何が望みだ？金か？まさか女じゃあるまいな。何でも好きなものを呉れてやる。だから、助けてくれ」

怪物の真ん丸な目が藤堂の顔を見詰めていた。巨大な口元が小刻みに震えているようだ。笑っているのかも知れない。

「何か言え。この野郎！いや。お願いだから許してくれ。頼む！お頼み申します」

次の瞬間、藤堂の右足を掴んでいた前足が大きく開いた。藤堂は絶叫しながら、ビルの谷間に落下していった。怪物が、満月が浮かぶ上空を見上げ、不気味な声を出した。まるで高笑いをしているかのようだった。

第一章 謎の美女軍団

三十分後、そのビルの一室では、床に寝そべった怪物が女をひとりずつ丸呑みにしているところであった。モデルのように美しい容姿をした女の下半身が、怪物の口の中に呑み込まれていた。

女は美しい顔を恐怖に歪ませ、長い黒髪を振り乱し、声を限りに泣き叫んでいた。美しい乳房が呑み込まれ、最後には万歳をするような格好で、ホロ穴の様な口に全身を呑み込まれた。

怪物の消化機能は凄まじく、既に二人を食べていた。残る四人の女達は、ダブルベッドの上でひと塊になり、震え慄いていた。

怪物は女達の顔をひとりずつ眺めていく。ハーフのように彫が深い女の首に舌を巻き付け、引き摺りだした。女の絶叫が部屋中に響き渡った。

「いい声で泣くな。お前の肉はさぞかし美味しいのだろう」

怪物が女を目の前に置き、地鳴りのような声で話しかけた。

「……………」

女は恐怖のあまり、腰が抜け一言も話すことができなかった。蒼白な顔をして美しい瞳を大きく見開き、怪物の前で震え慄いていた。

「俺はお前達を全員喰らうつもりだ。ただ食うのにも飽きた。お前にチャンスをやろう。俺を逝かせることができたら、助けてやらぬでも無い」

まるで地獄から聞こえてくるような陰鬱な声を聞いて、女は震えながらも怪物の顔を見た。

「い……逝かせる？」

「そうだ」

怪物は、スエットスーツの股間部分を触りだした。すぐに世にも醜い格好をしたオスの生殖器が顔を出した。

「こいつを舐めるんだ」

「……」

女はおぞましきあまり、顔を背けた。そのとき、怪物の口から舌が飛び出し、女の膣に突き刺さった。ゆっくりと口内に引き込んでいく。

「や……やります。お願い食べないください！」

女が泣き叫びながら懇願した。足首に巻きつい

ていた舌が怪物の口内に消えた。女は大きな瞳に大粒の涙を浮かべながら、床に座った怪物の股間に顔を近付けた。これまで経験したことのない異臭が鼻を付いた。思わず吐きそうになるのを何とか堪えながら、怪物の男根を見た。それは長さ三十センチくらいでビール瓶の太さほどもあった。先端部分は透明な液体に濡れていた。目を瞑り、リングほどもある巨大な睾丸に刺激を加えながら、男根の先に可愛い口を付けた。悪臭と戦いながら、先端部分を舐り始めた。意外なことに怪物の愛液は無味であった。女は瞳を見開き、怪物の顔を見上げるようにして、舌を使い続けた。

「お前、なかなか上手いな。今度は俺の番だ」
怪物の舌が蛇のようにならぬながら、女の膣に入り込んだ。舌は膣壁に絶妙とも言える振動を与えた。舌は振動を与えながら、伸縮して膣壁を擦り始めた。

最初は蒼白だった女の顔に赤みが差し始めた。女は死の恐怖を感じながらも、股間から湧き上がる快感に意識が遠のきかけていた。それほどまで

に舌による愛撫は巧みであった。

むき卵のようにすべすべで美しい尻がモゾモゾと動き始めた。愛撫はその後数分ぐらい続けられた。最後には、あまりの快感に鋭い喘ぎ声を上げ、潮を噴いた。怪物は意識が朦朧とする女を両手で抱きあげ、仰向けに横たわり、そそりたつ男根に跨らせ、一気に貫いた。

大量に潮を噴いていたため、膣は何とか巨根を呑み込むことができた。女にとってはフィストフアックを受けるほどの衝撃であった。白目を剥いて意識を失った。

「二度も逝きやがったか。俺の勝ちだな」

怪物は、下から女の膣を激しく突いた。白く美しい女の裸身が腰の上で揺れ動いていた。

最後に怪物は、地鳴りのような大きな唸り声を上げて、女を持ち上げた。男根から大量の精液が吹き出し、天井を汚した。両手で抱きあげた女を頭から呑み込んだ。口から食み出した女の真っ白な美尻が無残に震え慄いていた。

数時間後、女は残る一人となっていた。女は、

先に呑み込まれた女達の中で最も美しい容姿をしていた。身長は百七十センチ近くあり、肌は雪のように白く妖精のように美しい顔立ちをしていた。三十分近く、怪物の舌で逝かされ続けていた。

「美しい女よ。俺とゲームをしないか？勝てば助けてやってもいいぞ」

怪物は半ば意識を失いかけた女に声をかけた。ぼんやりとしていた女の表情が次第にはっきりとしていく。

「ゲームですって！そんなこと言ったって、アンタは私を食べるんでしょう。どうせ死ぬのならアンタの汚いものなんて絶対に舐めやしないわ！」
女は、怪物の顔を睨みつけるようにして毒付いた。

「気の強い女だな。そんなに死がお望みなら叶えてやろう」

怪物の口から、舌が蛇のように伸びてきて、女のアヌスに突き刺さった。大口を開けてゆっくりと女の裸身を手繰り寄せていく。

「いや！放して！」

「俺とゲームをする気になったか？」

舌がアヌスから抜かれ、怪物の口内に消えた。

「……」

女は無言で立ち上がり、意を決したような真剣な顔をして怪物に近付いていく。

「横になって口を開けて」

「ゲームなのか？ルールを教えてください」

「私を食いたいんでしょう？いいわ。食べなさいよ」

女は大きく開けられた口を両手で、さらに押し開き、自ら美尻を落とし込んだ。ぬめぬめとした舌が女の股間を舐めていた。

「私のお尻は美味しいかしら？」

女の美しい瞳には、醜い怪物への侮辱がありありと写し出されていた。

その時、窓の外に黒塗りの大型ヘリが現れた。側面のドアが開き、中から大口径の銃身が突出された。怪物は女を啜えたまま、ベッドから飛び降りた。鼓膜が破れるような甲高い連射音が響き、

窓ガラスが一瞬で砕け散った。ベッドも破裂するように粉々に吹き飛び、壁に無数の大穴が穿たれていく。ベッドの中身である羽毛が部屋の中を飛び交う中、怪物は、床を転げまわっていた。五十口径弾が身体を掠め、防弾性のウェットスーツが引き裂かれた。数発が体内にのめり込む度に怪物は、唸り声を上げた。

何者だ！怪物は心の中で叫んでいた。警察が東京のど真ん中で、重機関銃を連射しまくるなんて考えられなかった。怪物は、意識を失った全裸の女を口に啣えながら、腹ばいになり、隣の部屋に逃れた。女を啣えていることすら忘れていた。その部屋にも無数の銃弾が撃ち込まれた。仕方なく、腹ばいの状態で中庭に向かった。黒塗りのヘリが怪物の心を見透かすように、中庭の上空でホバリングして、銃弾を浴びせかけてきた。

強力な筋肉に覆われた胸部に被弾した。衝撃でウェットスーツが裂け、啣えていた女を血反吐とともに吐き出した。女はプールの水面に落下し、衝撃で意識を取り戻した。立ち泳ぎをしながら、

目の前で繰り広げられている黒塗りヘリと怪物の戦いを見詰めていた。

怪物が重さ数百キロはある彫像をヘリに向かって投擲した。彫像はヘリの鼻先を掠め、数百メートル下の路面に向い落下していった。ヘリは再び、怪物に銃弾を浴びせかけた。

怪物の巨体が吹き飛び、屋内に消えた。ヘリは少しの間、ホバリングの状態を保っていたが、屋上にふわりとした感じで着陸した。中から、十名近くの武装集団が飛び出してきた。皆、象狩り用の大口径ライフルを構えていた。その十名はすべて若い女であった。しかも、超がつくほどの美女であった。ぴったりと全身に張り付くような黒革のジャケットを着てズボンを履いていた。腰のベルトには、大口径リボルバーのレイジングブル四五四を納めたホルスターを固定していた。

彼女達は、長い黒髪をなびかせながら、建物内に突入した。先頭の女が大口径ライフル銃を発射した。耳をつんざくような大音響とともに壁に大穴が開いた。怪物は間一髪で銃弾を除けていた。

防弾性のウェットスーツはボロボロになり役目を果たさなかった。直撃すればいかに怪物の強靱な生命力を持つてしても助からないであろう。

怪物は、涎や尿をまき散らしながら、逃げ回った。女達の全員が怪物に向けて射撃を開始した。象をも一撃で倒す銃弾が怪物の前足や後ろ足を掠めた。怪物は転がるようにして再び、中庭に逃げ込み、そのままジャンプして三メートル上の屋上に飛び上った。

女達が後を追ってきた。先頭の女が中腰になり、続く女が、女の肩に乗り、勢いをつけて飛び上り、屋上の縁に飛びついた。その時、怪物が現れ、女の右腕を前足で掴み上げた。

女は、捕えられながらも、自由な左手でホルスターから大型リボルバーを抜き怪物に向けようとしたが、怪物の前足で拳銃を叩き落とされた。

「そこまでだ。この女の命を助けたければ、そこでじっとしていろ！」

怪物が地鳴りのような声で、屋上に上がってこようとすると女達に叫んだ。前足の鋭い鍵爪で捕ら

えた女の着衣を一気に引き裂いた。下着は身につけておらず、身長百七十センチあまりで、シミ一つなく雪のように白く美しい裸身が露になった。怪物の全身は銃弾により受けた傷で血塗れになっていた。大量の出血で意識が眩みかけていた。早く栄養を補給する必要があった。怪物は、全裸の女を片足で抱きかかえながら、すぐ下の縁にしがみ付き、怪物を睨みつけていた女に向けて舌を伸ばした。女の首に巻き付き、一気に引き寄せた。

その女を、空いている方の前足で抱き抱え、他の女達との盾にしながら、大口を開けて全裸に剥いた女のむき卵のような尻をホロ穴のような口内に押し入れた。女は、尻を呑み込まれながら、長い黒髪を振り乱し泣き叫んだ。怪物は、満面の笑みを浮かべながら女を呑み込んでいく。女の裸身は蜜のように甘く感じられた。

「姉さん！」

中庭にいた女達のひとりが絶叫を上げた。

「姉さんを助けて！」

その女は近くにいた年長の女に懇願した。

「撃てば、ふたりに当たるわ」

女達の美しい顔は、怒りのあまり紅潮していた。銃口も微かに震えている。怪物は女の胴体をほぼ呑み込んでいた。残るのは頭部のみだ。

「恭子！撃って、お願い！」

泣き叫んでいた女が、生きてそのまま呑み込まれる苦しみにもがきながら、最年少に見える女に懇願した。

「姉さん！」

その女は絶叫しながら、引き金に指をかけた。女の頭部を呑み込みながら、怪物はもうひとりの女を女達の間投げ付けた。女達が女をキャッチしようとした隙を盗んで屋上を疾走していく。女達は、放り投げられた女ともども中庭を転がった。

第二章 復活

「かなり、ひどくやられたわね」

「もうポンコツよ。邪鬼様から廃棄処分にするよ
う命令が下ったわ」

「こいつには随分と投資しているのにな」

「邪魔者を二名始末できたのよ。まあまあってと
ころじゃないかしら」

各種の医療機器が並べられた広さ二十畳ほどの
部屋に、白衣を着た若くて美しい女達ふたりが、
ベッドに横たわる全身血塗れの怪物を冷やかな視
線で見下ろしていた。怪物は意識を失っているよ
うで、ピクリとも動かなかった。

「どうやって、処分するの？」

「外洋に投棄することが決まったわ」

「蛙には水葬がお似合いね」

「ねえ、アリサ。貴女、最近めつきりと色っぽく
なったわね」

「そういう真由美だって、物凄くきれいよ」

モデルのような容姿を持つ女達は、互いにじつ
と見詰め合った。ひとりがもうひとりの腰を引き

よせ、唇を重ね合わせた。ふたりは互いの舌を貪りあった。ひとりの白魚のような指先が、相手のスカートをたくしあげ、パンティの隙間から股間に進入していく。股間を弄られた女が目を閉じて、低い喘ぎ声を上げた。

そのとき、怪物の瞼が僅かに開かれた。視点はボンヤリとして定まらなかった。怪物は夢を見ていた。

柿崎優斗それが男の本名であった。男は、オリンピックで世界の頂点を極めたことがある元柔道家であった。身長二メートル、体重百五十キロという巨体と人間離れをした体力で外国人選手もまったく歯が立たなかった。

男は、東京の杉並区に住んでいた。家族はいなかった。三十年の人生で付き合ったことがある異性は僅かであり、当時も独り身であった。

武道館で開かれた全国大会の帰り道、男が乗ったタクシーが交通事故を起こした。男は事故の衝撃で意識を失った。

意識を戻した場所は見知らぬ医療施設であった。

広大な医療用ベッドの上に、仰向けの姿勢で横たえられていた。両手両足を強靱な金属製のベルトで固定されているので、身動きができなかった。

「気がついたようね」

傍らに若くて美しい容姿をし、白衣を着た女が、自分の方を見下ろしていた。

「ここはどこだ？」

まるで、地獄の底から響いてくるような自分の声を聞いた。

「あんた？自分のことを覚えている？」

部屋にはもうひとり、白衣を着た美しい女がいた。

「……。駄目だ。何も思い出せない……」

「薬の効き目は完璧なようね」

白衣を着た女達が、互いに見詰め合い意味深な笑みを浮かべた。

「こいつを外してくれ！」

柿崎は、金属製のベルトで拘束されている四肢を震わせながら、不意に喚くように言った。

「邪鬼様に報告しなければならぬわ」

「こいつを眠らせるのが先よ。拘束ベルトが壊れそうになっているわ」

女達のひとりが、注射器を白衣のポケットから取り出し、柿崎の二の腕に突き刺した。意識は一瞬で深い闇に塗れた。

柿崎は暗い牢獄の中で目覚めた。四肢は拘束されてはいなく、冷たいコンクリート製の床に横たえられていた。数時間、あるいは数日間も経過しているだろうか？薬のせいでも時間の感覚が麻痺していた。さらに、自分のことをまったく思い出せなかった。名前も、今までどこに住み、何をしていたかも。記憶のすべてを失っていた。

目覚めてすぐ、自分の肉体の異変に気がついた。全身がヌメヌメとした粘液質の分厚い皮膚に包まれていた。両手を見たとき、柿崎は絶叫を上げた。人間の手ではなく、鋭い鍵爪と指の間には、透明なヒレがついていた。

両足も同じであった。ショックのあまり、絶叫を上げながら牢獄内を転げまわった。頑丈な鉄格

子で背中を強打し、思わず呻き声を上げた。

数時間後、柿崎は、鉄格子に顔をつけた状態で床に腹ばいに横たわっていた。両眼は、まったく光を失っていた。口元からは涎が滴り落ちていた。空腹のあまり、動くこともままならなかった。

不意に周囲が明るくなった。牢獄へと続く廊下に靴音が響いてきた。

「どうだ？調子は？」

柿崎は、腹ばいの状態で声の方に顔を向けた。色白で女のように美しい顔立ちをして肩先まで黒い髪を伸ばした男が立っていた。男は三十代半ばに見え、黒革のスーツを着ていた。両腕には、モデルのように美しい容姿を持った全裸の女を軽々と抱きかかえていた。女は、蒼白な顔で、震え慄のいていた。

「お前は誰だ？」

柿崎の空ろな声が牢獄内に響いた。

「貴様の飼い主だよ。名前が知りたいのなら教えてやろう。邪鬼（ジャキ）という名だ」

「俺をどうしようと言うのだ？」

「今にわかるさ。それより腹が空かないか？」

「ああ。死にそうなくらいに腹ペコだぜ。何か食わしてくれるのか？」

「お前に食事を持ってきてやった」

邪鬼と名乗る男は、女を片腕に抱き、空いている方の手で、鉄格子の鍵を解除し、ドアを開けた。それまで、死んだように横たわっていた柿崎が、不意に立ち上がり、邪鬼に襲い掛かろうとした。邪鬼がまるでハエでも払うように空いている手を振った。

柿崎の二メートル以上ある巨体が、宙を飛び壁に激突し、コンクリート製の床に横たわった。

「お前には無理だ。つまらぬ事など考えずに、今は腹を満たせ」

邪鬼は何事も無かったように、その場を後にした。

柿崎は、全身が粘液に包まれた巨体をゆっくりと動かし、コンクリート製の床に座った。すぐ近くに、女の白い裸身を認めた。女は、牢獄の片隅

で床に座り、両手で乳房を隠し、嗚咽を漏らしていた。恐怖に満ちた瞳で柿崎を見詰めていた。

柿崎の瞳に欲望の炎が燃え上がった。性欲と食欲が入り混じった不思議な感覚であった。柿崎は女の美しい裸身に欲情しつつも、身を引き裂くような激しい飢えも感じていた。先ほどの、邪鬼と名乗る男は、腹を満たせと言っておきながら、置いていったのは、美しい裸女のみだ。何！その時、柿崎は愕然とした。女を食えと言うことなのか！思わず立ち上がった。女が低い悲鳴を上げて、視線を反らせた。柿崎は女をまじまじと見詰めた。記憶を失ってはいるが、女の美しさは、十分過ぎるほどに理解できた。美しい切れ長の二重瞼を持ち、鼻筋がきれいに伸びていた。身長は百七十七センチぐらいだろうか。豊かな乳房に大きくくびれた腰からのヒップラインは、ため息が出るほどに美しかった。長い四肢をもちスタイルは抜群で、雪のように白く、シミひとつ無い美肌の持ち主であった。

思わず、女の顔に自分の顔を近づけていた。巨

大な口元からは、大量の唾液が滴り落ちていた。柿崎の僅かに残されていた理性は吹き飛んだ。意識が完全に、本能により支配された。

女は、嗚咽を漏らしながら、背中を壁に押し付けるようにして顔を背けていた。美しい顔が涙に濡れていた。

不意に柿崎の巨大な口から、長い舌が女の股間に向かって伸び始めた。女がそれを見て、鋭い悲鳴を上げた。舌は、女の股間に潜り込み、膣口に進入した。女は絶叫を上げて、仰け反った。柿崎の両手が伸びて、女の両足を掴み、大きく広げた。美しい膣には、柿崎の舌が突き刺さっていた。まるで、男根の様であった。柿崎は舌先を膣の奥に侵入させながら、細かく振動させると、女が号泣しながら身悶えした。

舌先が、細かく振動しながら、男根のように前後に動き出した。膣内で蠢く舌の膣口から出ている部分が、女のクリトリスに微妙な振動を与えていた。

しばらく愛撫を加えた。女の叫び声がやがて小

さくなつた。舌による膾壁とクリトリスへの刺激に恐怖も忘れそうになっていた。これまで感じたことの無い、凄まじいまでの快感が、絶え間なく背筋を走りぬけていた。知らぬ間に、潮を噴いていた。死の恐怖を感じながら、快感に悶え始めた女の変化を柿崎は、楽しんでいた。蛙のような醜い顔が、引きつって見えた。

女の腰が自然な感じで、舌の動きに合わせるように動き出した。女の腰の動きが激しくなつた。最後には背筋を仰け反らせるようにして果てた。

柿崎は、それでも女を解放することは無かつた。ぐったりとした女の白くて柔らかい裸身を持ち上げ、四つん這いにさせ、自分の方に尻を向けさせた。

シミひとつ無く、真っ白でむき卵のような尻が柿崎の視線を貫いた。驚くほどに長い舌で女の尻を舐め回した。果てしの無い快楽と同時に、耐え切れない程の空腹が不意に襲ってきた。舌の先端を鏃のように鋭くさせて、一気に女のアヌス目掛けて突き入れた。鋼鉄のように硬く鋭い舌が柔ら

かい内臓を突き抜け一気に女の口から突き出した。女は自分の口から突き出した血塗れの舌を一瞬、呆然と見詰め、続いて臓器を破壊された激痛に白目をむき、激しく痙攣した。柿崎が舌をゆっくりと戻していくにつれて、女の美しい尻が巨大な口内に呑み込まれていく。むっちりとした長い太腿が消え、豊かな乳房も呑み込まれた。最後に女は、白目をむき、全身を震わせながら、万歳をする格好でホロ穴のような口内に消えていった。身長百七十センチはある女の裸身が、柿崎の胃袋に納まっていた。腹部が異常なほどに膨れ上がり、微かに動いていた。

柿崎は蛙のような醜い顔に満面の笑みを浮かべていた。女の裸身を口内に呑み込んだ瞬間に感じた味を思い出していた。柔らかく、すべすべで、素晴らしい食感だった。生きたまま食われるという恐怖の中で、女は失禁していた。女の尿や汗が絶妙な味付けとなっていた。今も胃袋内で、女は強力な胃酸で溶かされていくところであった。柿崎の胃袋には味覚が存在していた。改造手術によ

り、作られた機能だ。女そのものが胃袋の中で分解し、これまで感じたことが無いほどの素晴らしい味わいだった。柿崎は暗い牢内で、両手を大きく広げ、仰け反るようにして歓喜の雄叫びを上げた。

瀬戸内海に浮かぶ孤島の近海を、意識を失った柿崎が、鼻先と白い腹を水面より上にして漂っていた。海流が柿崎を沖へ、沖へと運んでいた。ときより、白い腹が大きく上下した。

どれほどの時間が経過したのだろうか。真っ赤な血の色をした満月が、水平線より少し上の位置で鈍い光を放っていた。やがて、柿崎の近くに一艘のクルーザが近づいた。デッキには複数の人影が、呆然と立ち尽くしていた。それは、最初、ゆっくりと怪物の周囲を、回っていた。まるで何かを躊躇うようであった。一時間近くもそうしていた。

かつては世界的に有名な柔道家であり、交通事故後に何者かにより、醜い姿をした怪物に作り変えられた柿崎優斗は、カーテンの隙間から、きらめくような陽光が差し込む洋室で目覚めた。

広大なダブルベッドの上に、仰向けの姿勢で横たわっていた。起き上がろうとしたが、四肢が特殊金属製のベルトで拘束されており、まったく身動きができなかった。

「目覚めたようね」

いつの間にか、柿崎の近くには、白衣に身を包んだ女達ふたりが立ち、腕組をして、柿崎を見下ろしていた。ふたりとも、まだ二十歳ぐらいの若さであり、輝くような美貌とプロポーションの持ち主であった。

「ここはどこだ？」

まるで地獄の底から発せられたように、陰鬱な声が響いた。

「言葉を話せるようね」

女達は、柿崎の問いに答える訳でも無く、互いに見詰め合った。

「貴方、自分の名前を覚えている？」

「名前か。はっきりと思い出せないんだ。思い出そうとすると、頭の芯が痛み出すんだ」

「記憶を思い出させないように、改造を受けたよ
うね。私達の調査結果では、貴方の名前は柿崎優
斗。元はオリンピックで優勝経験がある柔道家よ。
思い出した？」

「俺がオリンピックで優勝した柔道家だと……。
駄目だ。思い出せない」

柿崎は、両目をつぶり、大きく首を振ってから、
深い溜息をついた。

「焦ることは無いわ。時機に思い出すわよ」

「お前達は何者だ？俺をどうしようと言うん
だ？」

「貴方の協力が必要なよ。邪鬼を組織もろとも
この世から、葬りたいのよ」

「邪鬼だって……。その名は聞き覚えがあるぞ」

「貴方をこんな身体に改造した張本人よ」

「……」

柿崎の身体が小刻みに震えだした。心の底から

怒りを感じていた。

その時、ドアが乱暴に開けられ、ナイフを手にした若い女が、飛び込んできた。

「あんたは、姉さんの敵よ！よくも姉さんを！」

「駄目よ！恭子。落ち着いて！悪いのはこいつじやなく、邪鬼よ！」

ナイフを手にして今にも柿崎に襲い掛かろうとしていた若い女に、二人の女達が組み付いて、激しくもみ合った。

「離してよ！あんた達に私の気持ちなんかわからないわ」

恭子という女は、二人の女達にナイフを奪われ、取り押さえられた。

「思い出したぞ！ビルの屋上で俺のことを殺そうとした奴らだな」

柿崎は、女達に取り押さえられながら、自分の方に憎悪に満ちた視線を向ける恭子という名の女を呆然とした表情で見詰めた。

「お前は、凶暴無比な怪物よ！よくも私の大事な

姉さんを……」

女はその場に泣き崩れた。

「殺したければ殺すがいい。どうせ俺は醜い怪物だ。俺を改造した邪鬼という奴にも見捨てられたんだ」

「駄目よ。あんたには、やってもらわなきやならないことがあるのよ」

その中で最年長と思われる女が、柿崎の瞳をじつと見詰めてきた。

「俺に奴らを葬り去る手伝いをしろと言うのだな？」

「そうよ。貴方をこんな姿に改造した組織に、復讐するのよ」

「……わかったぜ。邪鬼という奴をぶっ殺してやる」

柿崎は女の顔をまじまじと見詰め返した。次第に両眼がギラギラと輝きだした。

「理解してくれたようね。私の名は香織。この娘はマリアという名よ」

最年長で身長が百七十センチ近くあり、抜群のプロポーションと美貌を持つ女が、自己紹介をし

た。香織と名乗る女が紹介したマリアという女も同じくらいの身長があり、美しい容姿の持ち主であった。

マリアという女が、サイドテーブルの引き出しから金属製のベルトを取り出して、それを柿崎の頭部に巻き付けて固定した。

「このベルトには、爆薬が仕掛けてあるわ。私達が持っている携帯電話で爆発させることができるのよ。貴方が暴れだそうしたら、その時は覚悟してね。恭子の携帯電話からは起動できないから安心してね」

マリアが、説明しながら柿崎の四肢を拘束していた金属製のベルトを外し始めた。

「俺を信用していないという訳だな」

柿崎はベッドの上に起き上がった。

「私達は、貴方が暴れる様子を見せ付けられているのよ。今でも膝がガクガク震えているわ」

女達はベッドから、ゆっくりと離れた。

「そういえば、腹が空いてきたようだ。あんた達の身体は随分と美味しそうだな」

「こっちには、これがあるのよ」

マリアが自分の携帯を柿崎に見せ付けるようにして言った。

「冗談だよ。だが、腹は減ってきたな」

柿崎は醜い顔を引きつらせる様にして笑った。

「わかったわ。ついてきて」

恭子を除いた二人の女達は、柿崎をその部屋から連れ出した。恭子はひとり部屋に取り残された。

広い廊下の床は白い大理石で覆われていた。廊下の窓からは大海原が見渡せた。階段を降りて、地下室に向かった。

コンクリートがむき出しの地下室には、豆電球の暗い明かりが点されていた。そこに、三人の女達が、両手を鉄のベルトで拘束され、それから延びた鎖で天上から吊るされていた。三人とも全裸で美しい容姿を持っていた。三人は柿崎の姿を認めると、ブルブルと震えだした。

柿崎はその中のひとりに見覚えがあった。藤堂という裏社会の立役者を暗殺する際に、遭遇して

いた。女は柿崎に食い殺される寸前、謎の女達による来襲のために命拾いをしていたのだ。女は、恐怖と憎しみのこもった目で柿崎を見詰めていた。

「この女達は？」

柿崎の声は、微かに上ずって聞こえた。むき出しの醜悪な男根が、怒張し始めている。

「敵の組織に所属する女達よ。貴方の食料にするために浚ってきたのよ」

「俺に女達を食い殺せというのか？随分と冷酷なんだな」

「邪鬼を倒すためならなんだってやるわよ。貴方は自分の過去を聞かされて、人間の心を思い出したようだけど、身体はもう人間じゃないのよ。生きていくためには若い女の新鮮な肉が必要な」

香織は柿崎に見せ付けるように、一番近くに吊るされていた女の重たげな乳房を鷲掴みにした。

女の豊かで真っ白い尻が無残に震えだした。



「さあ、そこに横になるのよ」

マリアが携帯電話を見せ付けるようにして、柿崎に命令した。

「何のつもりだ？」

「今にわかるわ」

柿崎が床に仰向けの状態で横たわったのを確認してから、香織とマリアは一番近くに吊るされていた女の拘束ベルトを解除した。身長百七十センチ近くはあり、モデルのような容姿をした女を二人で抱き抱え、床に横たわる柿崎の顔の上に、女の美尻がくるように固定した。

柿崎は目の前に見える女の美尻に激しく、欲情していた。性欲とともに耐え切れぬほどの食欲も感じていた。

香織とマリアは、泣き喚く女の尻を柿崎の鼻に押し付けるようにした。

「美味しそうですね？早く口を開けなさい！」
言われなくとも、口は自然に開き始めていた。

顎の骨が外れ、女の尻が丸ごと入るほどに大きく開かれた。柿崎は今、本能に支配されていた。目

の前の美尻のみに意識が集中していた。

香織とマリアは女の尻を、柿崎の大きく開けられた口に落とし込んだ。

「いや！食べないで！死にたくない！」

女は尻を柿崎の口に沈めながら、泣き叫んだ。

柿崎は、口内で揺れ動く女の尻を舌全体で感じていた。舌が勝手に動き出し女の膣に侵入していた。女は恐怖のあまり失禁していた。若い女の尿を味わっていた。柿崎は知らぬ間に笑い声を上げていた。狂気がすべてを支配していた。柿崎は、床に座り込んだ。巨大な口からは、女の腰から上の上半身と、腰から下の下半身が、飛び出していた。

柿崎は、顔を上に向けて、口をさらに大きく開け、女を丸呑みにしようとしていた。女の絶叫が地下の牢獄に響き渡った。

一瞬後、身長百七十センチ近くもある女の裸体が、柿崎の口内に呑み込まれてしまった。

三人の美女達が捕らえられていた地下室には、

生き残った女と柿崎のふたりだけであった。生き残ったのは、以前にも柿崎に食い殺されそうになっていた女だった。柿崎は他の女達二人を丸呑みにし、満腹の状態で、女にフェラチオを強要していた。女は生き残ろうと死のもの狂いであった。

柿崎が、化け物の姿をしているが、元は普通の人間であったことを女達から聞かされていた。それがせめてもの救いであった。

緑色をした男根は、長さが三十センチほどもあり、獣臭を漂わせていた。女はしきりに吐き気を堪えながら、男根の先端を舐めていた。

一方柿崎は、コンクリートむき出しの壁に背をもたれながら、目の前で揺れ動く、むき卵のようにすべすべで、白い尻を食い入るように見詰めていた。

この女も楽しんでから食らうつもりであった。自分を醜い姿に改造した組織の女であった。憐憫の情など感じなかった。

「女。何て言う名だ？」

柿崎がいかにも横柄な感じで聞いた。

「……忍」

女は、一瞬、男根の先端を吐き出し、呟くように名乗った。

「忍ちゃんか。いい名前だ。俺はお前のように美しい女の肉が大好物なんだよ。口の中で必死に生きようと、もがき苦しむときの感触がたまらないのさ。小便も乙な味がするんだ」

それを聞いた女の白い背筋がワナワナと震えだした。柿崎は、忍という娘の精神まで貪り食おうとしていた。

「どうした？そんなに俺が怖いか？そうだな。喉が渴いてきたな。俺にお前の唾を吞ませてくれ」

柿崎は、忍を抱いた状態で、座ったまま壁から少し離れ、床に横たわり口を大きく開けた。

「……」

忍は柿崎の顔に近づき、黒髪を片手で押さえながら、柿崎の口内に唾液を流し込んだ。

「なかなか、聞き分けがいいな。美女の唾もいいもんだ。今度はお前の尿で渴きを癒してくれ」

「何？」

「小便を飲ませろと言っているんだ。二度も言わせるな。今すぐ食らってやろうか？」

忍は、柿崎の顔の上に跨り、目を閉じた。先ほどから激しい尿意を感じていた。

「いい眺めだ。お前のオマンコはきれいな色をしているぞ。匂いも最高だな」

柿崎が下から、舌で忍の股間をぺロリと舐めあげた。

「いや！」

忍の股間から尿が噴出して、柿崎の口内を満たしていく。柿崎はゴロゴロと喉を鳴らしながら、尿を飲み込んでいた。尿意が収まり、柿崎の顔の上でぐったりとした忍の腰に、柿崎の両手が掴みかかった。

「食事の時間だ。丸ごと食らってやるぜ」

柿崎が大口を開けて、その中に忍の美尻を落としこんだ。

「いや！食べないで。死にたくない！」

泣き喚く忍の腰を呑み込み、さらに腰の部分で折りたたむようにして呑み込んでいく。形の良い

乳房が消え、むっちりとした長い太腿が呑み込まれようとしていた。忍は髪を振り乱し、声を限りに泣き叫んでいた。

その時、柿崎が忍の両足首を掴み、己が口から引き抜いた。目の前に、全身が唾液に塗れた忍の裸身が見えていた。忍は恐怖のあまり、意識を失っていた。

「お前はもう少しだけ、生かしておいてやろう」

柿崎は失神した忍を、肩に載せ地下室を出た。

「どういうことなの？」

香織が一階の居室で柿崎を待っていた。真紅のチャイナドレスを着て、一人がけのソファに腰掛、長い脚を組んでいた。

「この女は暫く、生かしておくことにしたよ。風呂に入りたいんだ。それと俺の部屋は用意してくれているのか？」

柿崎は、膝にうつ伏せの姿勢で抱いた忍の盛り上がった白い尻を撫でていた。忍は失神したまま

「貴方は自分の立場がわかっていないようね？」

「俺はどうでもいいんだぜ。こんな無様な格好じやあ、生きていても仕方が無いからな。あんた達が俺に協力してくれるなら、言うことを聞いてもいいんだが……」

「……」

香織は暫くの間、腕組をして柿崎の顔を見詰めていた。

「いいわ。貴方の好きにきなさい。今日は十分に休養することね。明日、貴方の力を借りることになるわ」

それから柿崎は、香織に個室まで案内された。トータルの広さが五十畳ほどもあり、バストイレがあり、寝室や居間があるスイートルームとなっていた。

香織が立ち去ってから、柿崎は、意識を失ったままの忍を担いで、バスルームに入った。床や壁がすべて大理石で作られたバスルームには、長さ六メートルほどの小さなプール付であった。

大理石の床に忍を仰向けに横たえ、適温のシャワーで唾液を洗い流し、ボディシャンプーとスポンジで全身を洗い始めた。

途中、手を止めて忍の顔や裸身をうっとり眺めた。これほどまでに美しい女を見たことが無かった。

二十分後、柿崎はベッドの上で、赤ワインをラップ飲みしながら、全裸の忍を膝の上に横たえ、美しい尻を撫で擦っていた。柿崎は相撲取りが着るような大きなバスローブを羽織っていた。忍は意識を戻していた。

「腹が空かないか？」

忍に優しく話しかけた。

「どうして私を食べないの？」

忍の白い背筋がワナワナと震えだした。

「食べて欲しいのか？」

「いや。食べられたくなんか無いわ。生きたいのよ」

「心配するな。暫くは生かしておく。決めたんだ」

「お腹が空いたわ」

「そうか、待っている」

柿崎は忍をベッドに横たえ、居間に移動し、冷蔵庫からキャビアやチーズ、それに高級な赤ワインを二本取り出した。一本は自分の分であった。

「ワインは好きか？」

「ええ。それにチーズも大好きよ」

「キャビアもある。どうやら、俺の雇い主は金持ちのようだな」

柿崎は、器用な手つきでワインの栓を抜き、グラスに注いで忍に渡した。忍は余程、喉が乾いていたのか、一息で飲み干した。

「いける口だな」

「喉が乾いちやって。これ、頂くわ」

サイドテーブルに置かれたチーズを手で摘んで端の部分を食べた。

柿崎は、赤ワインをボトルで飲みながら、忍の様子を、目を細めるようにして見ていた。時折、深い溜息をついた。

「そろそろ、起きて。仕事の時間よ」

香織、マリアそして恭子の三人が、ベッドサイドに立ち、冷ややかな視線をベッドの上に向けていた。そこには、柿崎と忍が惰眠を貪っていた。

一糸も纏わぬ忍が、バスローブを着た柿崎に抱きしめられていた。柿崎の長い舌が忍の腰に巻きつき、その先端は臍に、深々と食い込んでいた。

「いったい、俺様の安眠を妨害する奴は、どこのどいつだ？」

柿崎が、大きな欠伸をしながら、起き上がった。忍の臍に食い込んでいた舌が、するすると口内に仕舞い込まれた。忍も目を覚まし、柿崎の影に隠れるようにした。

「さあ、約束どおり、働いてもらうわ。そうそう、お腹は大丈夫？何なら、その女を朝食にすれば？」
香織が、冷たい声で言い放った。

「腹は空いていない。昨日はふたりも食らったかな。ところで仕事場には、敵の女がいるのか？」

「いるわよ。貴方好みの最高にいかした女達が」

「そいつは話が早い。すぐに行こうぜ。邪鬼の野

郎を打ち殺してやる」

「邪鬼がいるかどうかはわからないけど。そこは奴にとって重要な場所なのよ。そこを滅茶苦茶にして欲しいの」

「オーケイ。何か、わくわくするぜ」

第三章 人食い猿

時刻は深夜零時過ぎ、場所は瀬戸内海に浮かぶ無人島に作られた邪鬼の研究施設であった。広大な地下の研究所の一室に、明かりが点されていた。数百畳もある室内には、各種の実験器具や無数の試薬類が収められた薬品棚が整然と並べられていた。

中央には、簡易ベッドが置かれ、その上には体長百六十センチほどのチンパンジーが横たわっていた。それは成獣であり、テレビに登場して愛くるしい演技を見せる幼獣とは異なり、醜い容姿と強靱な筋肉を有していた。

何かの夢を見ているのであろうか。瞼の下でし

きりと瞳が動いていた。

傍らには白衣を着た若くて美しい容姿を持つふたりの女達と、襟元がはだけた真紅のシャツを着た邪鬼が、チンパンジーを見下ろしていた。

「邪鬼様、実験は成功です。成獣のチンパンジーに殺人鬼の脳を移植し、体力も大幅に増強することができました」

女達のひとりが、固い表情で邪鬼に報告した。

「チンパンジーの成獣は、本来肉食を好む獰猛な性格を持っている。握力が三百キロ以上もあり、それをさらに増強させたからな。見掛けは小柄だが、人間など及びもつかぬ体力を有している。後は人肉の味を覚えさせることだ」

邪鬼は、眠り続ける野獣の様子を満足げな笑みを浮かべながら見詰めていた。

「はい、三日間、絶食させております。目覚めたら、拉致してきた若い女達を食料として与えます」
「完璧だな。これで小うるさいメスネコどもを一網打尽にしてやることができる。そうだ首魁の女は殺させるな。俺がたっぷり可愛がってやる。」

最後には美味しく頂くことにする」

邪鬼は、この世のものとは思えぬほどの美しい顔に氷のように冷たい笑みを浮かべた。

「わかっていると思うが、一言いっておく。今回の作戦が失敗したときは、一号、わかっているだろうな？そのとき、お前は肉となり我に貪り食われることとなる」

一号と呼ばれた女の美しい顔がみるみるうちに蒼白になっていく。

邪鬼は、一号に抱きつき、唇を奪い白衣の隙間から手を差し入れ、下半身を弄り始めた。邪鬼の指が女の膣を貫き、内部を刺激していた。

「お前には、毎日果物と野菜だけを与えているから、肉質は最上級の筈だ。考えただけで涎が出てきたぞ。せいぜい、俺に食われぬよう頑張ることだな」

邪鬼は美しい瞳に涙を浮かべ、震え戦く女の白衣に両手をかけ一気に引き裂いた。下着はつけておらず、極上の裸身がむき出しにされた。

恐怖に怯えた女の股間から、小水が滴り落ちた。

「心配するな。今は食わぬ。実験の成功を慰勞してやる。今晚は極上の悦樂を味わうんだ。二号、お前も一蓮托生だ。一緒に来い！」

邪鬼は一号を軽々と肩に担いだ。一号のシミひとつなく、むき卵のようにすべすべの美尻が、邪鬼の肩の上で震え戦っていた。部屋を出ようとしたが、立ち止まった。

「着ているものをすべて脱げ」

二号は言われるままに白衣を脱ぎ捨てた。一号にも劣らぬ美しい裸身が現れた。重たげな白い乳房がたわわに実っていた。邪鬼は空いている方の手で、全裸で呆然と立ち尽くす二号を引き寄せた。

床に肩膝をつかさせた。ズボンのジツパーを下ろし、黒々として猛々しい男根をむき出しにして、二号の口に突き入れた。二号は恐怖に怯えながらも、邪鬼の腰に両手をかけて、口からはみ出しそうな巨根を啜え、口腔性交を始めた。

ある会員制レストランに政財界の大立者達が、礼服に身を包み一同に会していた。

時刻は十八時を少し回ったところだ。血のように赤い夕日が窓ガラスに差し込んでいた。広さ数百畳はあるレストランの中央には、真っ赤に燃える炭がくべられた大型コンロが配置され、その上には、首を切断された若い女の裸身が、鉄製の杭でアヌスから首の切断面までを串刺しにされて、炙られていた。

場内には肉を焼く香ばしい匂いが立ち込めていた。天井に据え付けられた巨大なファンが、煤と煙を屋外へと排気していた。

炭火で炙られる首無し女の周りでは、艶やかな色彩のチャイナドレスを着た女達が、刷毛で女の裸身にオリブオイルを塗りつけ、焦げ目ができないように見張っていた。

また、会場の隅では、調理台が設けられ、頭部

が禿げ上がったコックが、肉切り包丁で若い女の裸身を切り刻んでいた。女は片足と片腕を切断されていたが、まだ息があつた。白目を剥いて意味不明な言葉を呟きながら、全身を震わせていた。鋭い切っ先の肉切り包丁が、女の白い腹部を切り裂いていく。女は両目を見開き背筋を仰け反らせた。コックの両手が口を開けた腹部に差し込まれた。

次の瞬間、血塗れの肝臓が取り出された。女は一瞬後、絶命し調理台の上に横たわつた。切り取られた腿肉や内臓が包丁で捌かれ、皿の上に盛り付けられていく。

一方、串刺しにされ、全身を炙られていた女の裸身が、テーブルの上に置かれた銀製の大皿に載せられ、別のコック巨大なナイフとフォークで、その肉を切り分けていた。切り口から肉汁があふれ出していた。

捌かれた肉は皿に盛られ、場内に並べられたテーブルへと運ばれていく。テーブル席では、政財界の有力者達が、人肉料理に舌鼓を打っていた。

あちこちから深い溜息が聞こえていた。

「早くして！時間が無いのよ」

自動小銃を小脇に抱えた香織が、小声で柿崎に命令した。

そのレストランと同階にある厨房では、柿崎が、床に座り全裸の若い女を大口に入れようとしていた。その女は、晚餐会用に用意された食材のひとつでありであった。女は意識を失っていた。女のシミひとつもなく、すべすべの尻が呑み込まれていく。身長百七十センチ近くもある美女が、一瞬で丸呑みにされた。

柿崎は大きく膨れた腹部を満足そうに撫で摩つた。

「じゃあ、手筈どおりに行くわよ」
マリアが身につけていた衣服を脱ぎ捨て全裸に



なった。近くに置かれていたキャスター付きテーブルの上に載せられていた大皿の上に、うつ伏せの姿勢で横たわった。その際、腹の下にミニウージー機関銃を入れた。

香織と恭子は、床に横たわるコック達から、調理服を奪い身に纏った。コック達は眉間を撃ち抜かれ絶命していた。コックに化けた香織と恭子は、冷蔵庫から取り出したボール一杯のトマトやレタスなどの野菜を、大皿の上に横たわるマリアの周りに盛り付けていく。

「本当にマリアのお尻って、美味しそうね。女の私でも惚れ惚れしちゃうわ」

「後で食べさせてあげるから、我慢してね」

マリアは、大皿の上から香織にウイंकを投げかけた。

「俺はどうすればいい？」

「私達が暴れ出したら、レストランに来るのよ。」

そこで暴れるだけ暴れて。皆殺しにしてもいいわ」

「了解！女は食らっていいのかわ？」

「どうぞ、好きなように」

女達は、互いに一瞬、見詰め合った。皆、緊張した面持ちであった。香織と恭子が、 MARIA が載るキャスター付テーブルを押して調理場を後にした。

レストランの両扉が開かれ、香織と恭子が押すキャスター付テーブルが現れた。テーブルの上の大皿に横たわる MARIA の裸身にスポットライトが当てられた。

「皆様。本日のメインディッシュの時間となりました。今宵の食材はミスユニバースに選ばれたほどの美女です。その美しい肢体は、非の打ち所が無いほどの美しさを秘めております。存分に堪能してください。各テーブルにある用紙にお好みの調理方法をお書きください。それを後ほどお伺いしますコンパニオンにお渡しください。料理はフレンチ、イタリアン、中華なんでも結構です」

どこから、ともなくアナウンスが流れた。会場内に感嘆のどよめきが、広がっていく。MARIA の裸身は、スポットライトに照らし出され、輝くよ

うな美しさと官能を周囲に発散していた。マリアを載せたテーブルが、コック達が待つ調理コーナーへと、押されていく。

調理コーナーでは三人のコック達が肉切り包丁を手にして待ち構えていた。

「よく来たな。お嬢ちゃん。俺様がお嬢ちゃんのお肉で極上の料理を作ってあげるよ。お嬢ちゃんにも食べさせてあげたいくらいだ」

デップリと太った赤ら顔のコックが卑しげに笑った。

「じゃあ、仕込むとするか」

痩せ型のコックが、腕まくりをしながら、マリアに近付いてきた。

「捌く前に、腸内の具合を確認しろよ」

先ほどの赤ら顔のコックが、痩せ型のコックに命令した。

「そうだな。そいつは肝心なことだな」

痩せ型のコックが、肉切り包丁をテーブルの上に置いて、マリアの尻を片手で押さえ、空いている方の手を割れ目に差し入れ、人差し指の根元ま

でアヌスに挿入させ、内部を掻き回した。

その時、マリアが肉切り包丁を掴み、コックの首筋に向けて一閃させた。コックが驚きの表情を浮かべ、自分の首から噴出す鮮血を見詰めた。すぐに仰向けの姿勢で、床に倒れた。

マリアが自分の身体の下に隠しておいたミニウージーを取り出し、周囲に向けて乱射した。近くにいた香織や恭子も自動拳銃を乱射し始めた。

政財界の有力者達が、全身を穴だらけにされ、床に崩れ落ちていく。空葉莢が飛び交い、硝煙が広がっていく。

騒ぎを聞きつけた四人のガードマン達が、サブマシンガンを構えながら、会場に突入してきた。ガードマン達は、皆、若くて美しい女達であった。黒色の戦闘服を着ていた。彼女達の前に巨大な黒い影が現れた。防弾スーツを着た柿崎であった。柿崎の口から、真っ赤な舌が矢のように飛び出し、先頭の女に絡みついた。女の身体が、空中に浮き上がり、後続の女達に向けて振り下ろされた。衝撃で女達が床に転がった。勝負はあつけないほど

一瞬で終わった。立ち上がろうとするガードマンの女達を香織と恭子が銃で威嚇した。

二人は、武装解除した女達の後ろ手に手錠をかけた。手錠はガードマンの女達のものだ。抵抗を封じた後、女達の衣服をナイフで切り裂き、全裸にさせた。

一方、マリアは、全裸のまま、サブマシンガンのマガジンを交換しながら、会場内にいた調理係や客達の銃殺を続行していた。若くて美しい女のみは、殺害しなかった。会場内は、硝煙が立ち込め、床には多数の遺体が転がっていた。

女達は協力して生き残った娘達を全裸にさせ、猿轡を噛ませて壁際に立たせた。総勢、八名の美女達が、蒼白な表情をして震え慄いていた。

「あっけないな。邪鬼の野郎もいなかったし」
柿崎が巨大な腹を擦りながら香織に話しかけた。
既に一人の女を喰らっていた。

「何かおかしいわ」

香織は腕組をしながら真剣な眼差しで、柿崎の顔を見詰めた。

「香織。早く引き上げましょう。邪鬼はいなかったけれど、奴のシンパである政財界の有力者を皆殺しにすることはできたわ。奴の顔にドロを塗ったのも同じよ」

恭子が背後から、香織の肩に手をかけた。

「そうね。ぐずぐずしている暇は無いわ。恭子。

マリア。女達を地下の駐車場まで誘導して」

地下駐車場へは、エレベータは使用せず、非常階段を使った。先頭に行く柿崎は拉致した敵の女二人を両肩に担いでいた。二人とも全裸だ。極上の美尻が震え戦っていた。すぐ背後には香織やマリアや恭子が、全裸にむかれた捕虜の女達を引き摺るように続いた。捕虜の女達は手錠を掛けられた上、腰紐で数珠繋ぎにされていた。

地下駐車場まで後数階のところ、急に柿崎は歩みを止めた。

「どうしたの？」

背後から香織が、押し殺すような声で聞いてきた。

「しっ！前方に何かいるぞ。気をつけろ」

柿崎は、すぐ背後にいた香織に捕虜の女二人を預け、上半身を前屈みにさせ戦闘モードへと移った。一瞬後、階段を転げ落ちるような感じで降り始めた。

何かが柿崎の懐に飛び込んだ。身長二・三メートル、体重四百キロの巨体が吹き飛ばされ、コンクリート製の壁に激突して、大音響を上げた。

「野郎！」

柿崎は、出血した口元を手の甲で抑えながら、立ち上がった。目の前に、体長百六十センチ位の黒い影が佇んでいた。

「お前が、蛙か。聞いていたほど強くは無いな」
黒い影と見えたのは、全身を黒いガウンで覆っていたからだ。二つの真っ赤な瞳が、薄暗い階段ホールの中で、爛々と光り輝いていた。

「小さいの。随分と威勢がいいじゃないか？」

柿崎が長身を利用して、組んだ両腕を上から振

り下ろし、黒いガウンの主を上から押し潰そうとした。黒いガウンから腕が突き出してきて、柿崎の両腕を頭上で受け止めた。数トン以上もある衝撃を軽々と受け止める力は、人間ではあり得なかった。

「その程度か？」

ガウンに隠れてよくは見えないが、楽しそうに笑っている感じであった。

「言わせておけば。このチビ野郎が！」

柿崎の片足が、ムチのように撓り、相手の股間を蹴り上げた。またしても黒い影は、片手で蹴りを静止させた。

「今度は、こっちの番だぜ」

黒い影から不気味な笑い声が漏れ、疾風が柿崎の腹部を襲った。凄まじい衝撃であった。四百キロの巨体が宙を飛び、階段を転げ落ちた。

そのとき、銃声がして、踊り場佇む黒い影の上体が微かに動いた。

「柿崎！大丈夫？」

踊り場の隅には、自動拳銃のベレッタを構えた

香織が立ち、黒い影を狙っていた。

「美味しそうなお譲ちゃんじゃないか」

黒い影が疾風のように動き、香織の上半身に抱きついた。あまりの速さに引き金を引くことはできなかった。抱きつかれた衝撃で拳銃を床に落とっていた。

衝撃で万力のような両腕で上半身を押さえつけられた。獣のような臭い息で香織は絶息しそうになった。毛むくじらの手で革のスーツを紙のように引き裂かれた。零れ落ちた桃のような乳房を激しい勢いで舐られた。圧倒的な力の前に、まったく反撃ができなかった。

全裸にむかれ逆さまに抱き上げられた。ザラザラとした舌で、臍を舐られた。

99 「チビよ。あんまりいい気になるんじゃないぜ！」
いつの間にか柿崎が、黒い影の背後に立っていた。黒い影が振り返った。数トンの威力はある正拳が影の頭部に突き刺さった。影が吹き飛ぶ寸前、柿崎は香織を奪い返していた。黒い影は、コンク

リート製の壁に激突した。衝撃で壁の一部が崩れ落ちた。羽織っていた黒いガウンが床に落ちていた。

床に体長百六十センチ余りの成獣のチンパンジーが伸びていた。

「こいつは、邪鬼に改造されたモンスターだったのね。殺したの？」

全裸の香織が、柿崎の腕の中で呟くように言った。

「わからない。死んだように動かないが。こいつは、ただの猿とは思えない」

「たぶん。能力をアップせれている筈よ。ところで下ろしてくれない」

「あなた達、何やっているの？」

恭子が、上階から駆け下りてきた。ふたりは恭子の方に振り向いた。

「駄目じゃない。いいというまで降りてきたら」

香織が、床に降ろされ、引き裂かれた革のスーツを拾い始めた。

「どうして、香織は裸なの？」

「気を付けて、そこに邪鬼がよこしたモンスターがいるわ」

「どこにいるの？」

「何？」

柿崎が、チンパンジーから目を放したのは一瞬間のことであった。

倒れているはずの床から、忽然と姿を消していた。その時、上階から銃声が聞こえてきた。

「上だわ！ マリア！」

香織が絶叫しながら階段を駆け上がった。上階の踊り場には、捕虜にした全裸の女達が、折り重なるような感じで床に横たわっていた。皆、手錠をかけられ、腰紐で数珠繋ぎにされていたので、見捨てられたものと思われる。あるいは、最初から救う気等無かったかだ。皆、意識を失っているようだが、怪我をしているようには見られなかった。

101
その中にマリアの姿は無かった。近くの非常扉が開け放たれていた。扉の近くの床には、マリアが着ていた革スーツの残骸と、拳銃が落ちていた。

「マリア！」

恭子が拳銃を構え、後を追おうとした。恭子の方を香織が掴んだ。

「駄目よ！恭子！諦めるしかないわ」

「だって、マリアは仲間なのよ」

恭子が振り返り、香織の顔を見詰めた。

「これは任務なの。マリアも分かっている筈よ」

それを聞いた恭子は、肩をがっくりと落とした。

「グズグズしている暇は無いぜ。追ってが、やってくる」

柿崎が、八人もの女達を両腕で前に束ねるようにして抱えていた。

「あなたひとりで、全員を運ぶのは無理よ。何人かここで始末していくわ」

香織が自動拳銃を腰のホルスターから引き抜いた。

「駄目だ。こいつらは俺の貴重な食料だ。置いていくなんて、そんな勿体無いことはできない」

柿崎は、話しながら既に階段を降り始めていた。

地下駐車場には、香織達が乗ってきた大型バンを留めておいた。拉致してきた八人の美しい捕虜達は、一人を除いて荷物のように後方の荷台スペースに詰め込まれた。女達は皆、意識を取り戻していた。車内は女達が発散する汗の匂いでむせるほどであった。

香織と恭子は運転席と助手席に座った。二人とも一言も発しなかった。香りが無言のまま、大型バンを発進させた。

後部座席を占領した柿崎は拉致してきた女達のひとりをも、膝の上に座らせていた。涙を浮かべ、震え慄く女の裸身を手で触りまくっていた。窓にはカーテンがかけられているので、外部からは車内の様子は見えない。広い車内は柿崎がいるだけで狭く感じられた。大型バンは地下駐車場を出て、すぐにビルの合間の小路に入った。香織は慎重な運転で、大型バンを走らせていく。

「最高の女達だぜ。これで一週間の食料は確保できた」

パ飲みにして一気に飲み干した。

「アルコールの所為で腹が減ってきたぜ」

「まだ、食べるの！さっきひとり食い殺したばかりじゃない！」

恭子が柿崎の方に振り返り、呆れ返ったような顔をした。

「腹が減るのは俺の所為じゃない。それにこいつは憎たらしい邪鬼の手先ときている」

「止めて！殺さないで！何でも言うことをきくから」

柿崎に抱かれ、裸身を觸られていた女が、涙を浮かべながら命乞いをした。

その言葉に香織が興味を示した。運転しながら女に問いかけた。

「マリアをどこに運んだか、言いなさい。そうすれば貴女の命は助けてやるわ」

「おいおい、俺はこの女をこれから喰らうつもりなんだ。余計なことほしないでくれ」

「黙りなさい！アンタの命なんか、私の思い通り

なのよ」

恭子は、マリアが持っていた起爆装置付の携帯電話を柿崎に見せつけた。柿崎の頭部には、爆薬が仕込まれたベルトが巻かれたままだ。

「よしなさい。恭子。そんな物を今爆発させたら、皆お仕舞いよ」

「そうだぜ。お前だつて、ミンチになっちまうぞ」
「アンタも黙っていてくれない。マリアは私達の家族も同然なのよ、アンタには私達の気持ちなんてわからないでしょうけど」

「わかったよ。姉御。好きなように」
「で、話す気になったの？」

恭子が助手席から手を伸ばしてきて、女の重たげな乳房を鷲掴みにした。

「無駄なことよ」
女は俯いたまま、呟くように言った。

「何ですって！」
今度は、香織が、ルームミラー越しに女の頭部を睨み付けた。

「邪鬼様の隠れ家なんて、無数にあるのよ。私達は末端の兵士に過ぎないわ。一つ言えることは、

貴女達の仲間が死んだのも同然よ。今頃、死ぬほど犯されている筈だわ。最後には喰われる運命よ」
「そうなの？ 貴女は何も知らないのね。柿崎。女を食べてもいいわよ」

香織が表情一つ変えずに冷たく言い放った。

「いやよ。死にたくないわ！」

女は長い黒髪を振り乱し、泣き叫んだ。

「お許しが出たという事で、いただきますか？」

柿崎は泣き叫び、命乞いをする女を抱え上げた。顎を外し巨大な口をさらに大きく開けた。女のむき卵のようにすべすべで、シミひとつ無い美尻を呑み込んだ。女が恐怖のあまり、失禁した。車内に濃厚なアンモニアの匂いが満ちた。

香織も恭子も、無表情で正面を見詰めているだけだった。後部席では柿崎がミス日本に引けを取らぬほどの美女を今まさに呑込もうとしていた。女の裸身が柿崎の口内で揺れ動いていた。柿崎は泣き叫ぶ女の頭部を両手で口内に押し込んだ。柿崎の巨大に膨らんだ腹部は、大きく動いていた。すぐに動かなくなつた。柿崎は大きな欠伸をした

後で、深い寝息を立て始めた。

柿崎達が、邪鬼が主催するパーティを襲撃してから、数時間が経過していた。邪鬼の手下である改造猿により、拉致されたマリアは、東京都内にある邪鬼のアジトに連れ込まれていた。そこは、高層ビルの地下三階に作られた地下室であった。広さ二十畳ほどの室内には、中央に特大のダブルベッドが鎮座していた。他には、液晶テレビや小型冷蔵庫が置かれていた。

マリアは猿により催眠ガスを嗅がされ、着ていた衣服をすべて脱がされた状態で、その部屋に運び込まれた。猿は肩に担いでいたマリアの裸身をベッドの上に放り投げた。身に付けていたマントを部屋の隅に放り投げてから、小型冷蔵庫から缶ビールを取り出して、一気に飲み干した。

「そろそろ起きろよ。お譲ちゃん」

猿は首に巻かれた金属製のベルトを操作していた。それは、どうやら発声器のようであった。猿の唇の動きに合わせるようにして、乱暴な言葉が

ベルトの部分から聞こえてきた。

「ここはどこなの？」

マリアはベッドに落とされた衝撃で、意識を戻した。睡眠ガスの所為か、少し気分が悪かった。目の前に猿が自分を見詰めているのを確認した。猿の股間からは、黒々とした男根が突き出ていた。先端部分から体液が滴り落ちていた。

「流石に組織の女は違うな。俺のことが怖く無いのか？」

「どうせ、私を殺す気なんでしょう？」

マリアの瞳は、猿の股間に釘付けとなっていた。猿の自分に対する欲情が、痛いほどにわかっていった。

「ただでは殺さない。少し楽しませてもらうぜ」

猿がマリアの方に向かって二、三歩歩き出した。

「いや。来ないで。あっちに行つて！」

猿から逃れようとベッドの隅に後退するマリアの表情は青ざめていた。

「エテコウの俺に抱かれるっていう気分はどんなだ？お前のマ*コもケツも舐め回してやるぜ。最

後には俺の汚らしい精子で妊娠させてやろうか？」

猿の醜い顔が、欲情のため引き攣っていた。

「来ないで！ 獣！」

マリアは近くにあった枕を投げつけた。猿は枕を軽くかわし、無防備な状態で一気に飛び掛った。武道に精通していたマリアの長い足が、弓のように猿の脇腹に炸裂した。衝撃で猿は壁まで飛ばされ、背中を壁に強打した。

「中々、やるじゃないか。気の強い女の味を試してみたかったんだ」

猿は満面の笑みを浮かべながら、すぐに立ち上がった。渾身の力を込めた回し蹴りもほとんど効いていないようであった。先ほどとは違って慎重な足取りでマリアに近付いてきた。先に動いたのはマリアであった。雪のように白く瑞々しい裸身が宙を飛んだ。猿の顔を両太腿で挟み込み、体重を掛けながら、一回点した。反動で猿の身体も回転し、床に背中を打ちつけた。マリアは、床に転がったまま、サルの顔を両太腿で締め上げた。

「お前のマ*コは、最高にいかした味がするぜ」
猿は頭部を締め上げられながら、膺を舐めていた。前足でマリアの豊かな乳房を鷲掴みにして揉みしだいた。太腿による締め付けはほとんど効いていないようであった。頭部を挟まれたまま、立ち上がった。マリアの裸身が宙に浮いていた。そのまま、ベッドの上に倒れこんだ。簡単に太腿を振り解き、ベッドの上でマリアを羽交い絞めにした。すぐ近くに醜い猿の顔があった。

猿は、マリアを仰向けにして激しい勢いで乳房を舐め回した。猿のせわしない手がマリアの股間を這い回っていた。指を乾いたアヌスに入れられ掻き回された。マリアは声を限りに泣き喚いた。気丈なマリアであったが、獣に全身を嬲られているのだ。絶えられるものではなかった。自由な両手で渾身の力をこめて猿を殴りつけたが、蚊に刺されたほどの衝撃も感じないようであった。猿が物憂げな感じで暴れるマリアの脇腹を叩いた。軽く手を振っただけに見えたが凄まじい衝撃を感じた。全身の力が抜けた。猿は静かになったマリア

の太腿を大きく広げ、むき出しにしたサーモンピンク色の臍に喰らいついた。

ザラザラとした舌が臍部を這い回っていた。マリアはおぞましきのあまり、気が狂いそうになっていた。猿は狂ったように臍を舐め続けている。

マリアには為すすべがまったくなかった。この獣に犯された後、貪り食われる光景が脳裏をよぎった。



今度、猿はマリアをうつ伏せにさせ、シミひとつない深い尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを激しい勢いで舐り始めた。舐め回され、指を入れられ直腸をかき回され、再び舐られた。激しい陵辱が延々と続けられた。

最後には、ベッドの上に四つん這いの姿勢を取らされ、背後から男根で貫かれた。猿は激しい勢いで腰を使ってきた。男根で膣壁を擦られ、指でクリトリスを刺激され、最初はおどましさのあまり、号泣していたマリアも時間の経過とともに身体の芯から疼くものが湧き出してきた。

乳房を乱暴に鷲掴みにされ、膣内に猿の精液を感じながら意識を失った。

数時間後、別室でマリアは意識を取り戻した。そこも先ほどの部屋と同様に窓の無い部屋であった。マリアは全裸で木製の椅子に縛り付けられていた。広さが五十畳ほどもある部屋には、高級イタリア製のソファセットや大型液晶テレビが配置されていた。一人がけのソファでは、見たことも

無い美しい顔立ちをして、真っ赤なシャツに黒いズボンを履いた三十代くらいに見える男が、ワイングラスを片手に、マリアに向けて微笑みかけていた。

三人がけのソファには白衣を着て、二十代くらいに見える美しい女が座っていた。

「お目覚めかな」

男は深いバリトンの声で、マリアに話しかけてきた。

「ここは何処だ？」

マリアは男を睨み付けた。

「そうそう、名前を聞いていなかったね。私の名は邪鬼。君の名を教えて欲しい」

「貴様が邪鬼か！」

マリアの美しい顔がみるみるうちに紅潮した。

「私に恨みがあるようだな。まあいい。話したくないなら薬を使うだけだ」

邪鬼がそう言うと、白衣を着た女が立ち上がった。手には小型の注射器を持っていた。女はマリアに近い付き、マリアの盛り上がった乳房を鷲掴

みにした。

「これは強力な自白剤よ。何でも話したくなるわ」
乳房を握っていた手をマリアの股間に忍ばせた。

「貴女、本当に素晴らしい身体をしているわ。こ
この締め具合も最高ね」

ネチネチとした感じでマリアを舐ってきた。白
魚のような指先で膣内をかき回された。先ほど猿
に陵辱された感触が蘇ってきた。もうどうでも良
かった。一瞬舌を嚙んで死のうと考えた。しかし、
思い止まった。香織達は隠れ家を変える筈であっ
た。仲間が敵に捕らえられた場合、必ずそうする
ことにしていた。

女がマリアの膣を指で舐りながら、乳房を舐め
回していた。

邪鬼は、ワインを飲みながら、その様子を見て
いた。女は膝間付いて、マリアの股間に顔を入れ、
膣を舐り始めた。クチュクチュと隠微な音が部屋
に響いていた。邪鬼が立ち上がり近付いてきた。
マリアの顎に手をかけた。一瞬で顎が外された。

115
邪鬼はズボンを脱いで黒々とした男根をむき出し

にして、それをマリアの口に突き入れた。マリアの黒髪を掴みながら、激しい勢いで腰を振った。マリアは息もできず、苦しさのあまり失禁した。白衣を着た女が、喉を鳴らすようにしてマリアの小水を飲んでいた。

邪鬼はマリアの口内に白濁した精液を放出してから、マリアの顎を元に戻し何事も無かったようにソファに戻りワインを飲み始めた。

女が、意識が朦朧とするマリアの腕に注射器を突き立てた。

三十分後、マリアは頬を平手で叩かれた。混濁した意識の中で、マリアを見下ろしている邪鬼を認めた。

「仲間は数十人くらいか？隠れ家も転々としているようだな。お前の名はマリアというのだな。工藤マリアか。お前の姉さんは素晴らしい味だったよ。特に尻肉が美味かった」

「今回は、私は食わぬことにしよう。今はそんなに空腹ではないのだよ。お前の肉が食いたくて仕方がないという奴がいてね」

邪鬼の背後から、猿が姿を現した。

「お前のマ*コとケツの穴はきつくて、最高に気持ちいが良かったよ」

猿の言葉を聞いて、先ほどの屈辱が蘇ってきた。

「私はここで見学させてもらうことにする」

邪鬼は、マリアの重たげな乳房を握り締めてから、一人がけのソファに座り、赤ワインを飲み始めた。猿が、木製の椅子に縛りつけられたマリアの前に膝間ついた。

「お前のアワビはどんな味がするのかな」

次の瞬間、マリアの口から絶叫が迸った。股間から、これまで感じたことの無い激痛が走った。目の前では口の回りを真っ赤にした猿が、マリアの膣肉を租借していた。すぐに、鋭い爪でマリアの柔らかい腹部を縦に切り裂いて、肝臓を取り出し、満面の笑みを浮かべながら齧り付いた。

マリアは全身を震わせ、泣き喚いた。猿がマリ



アの腹腔に顔を入れて内臓を美味そうに食った。

